

果をレーダーチャート方式で図化するものである。それぞれの集計方法は以下の通り。

(Aタイプ集計方法)

レーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・ブナ材などのいわ

## 近世遺跡出土の茶会席食器としての漆器資料

北野信彦

(くらしき作陽大学)

### 1. はじめに

東京をはじめとする都市域では、1980年代以降都市再開発に伴う発掘調査の事例が急増した。ここ数年は長引く景気低迷の関係から一時期ほどの盛況さはないものの、依然多くの調査が進行しており、膨大な数量の近世（16世紀末もしくは17世紀初頭の織豊期～19世紀中期の幕末期）関連の遺物や遺構が検出されている。これは東京や金沢をはじめとする大都市の多くは近世に都市開発が始まったことに由来しようが、結果として今日「近世考古学」の研究成果の蓄積が大きく図られることになった。この代表的な成果の一つに、瀬戸・美濃や有田・伊万里等の古窯跡の調査成果と消費地遺跡出土資料をリンクさせて極めて精緻な器型分類や編年作業を行った近世陶磁器の研究がある。一方、低湿地性遺跡を中心として、陶磁器とともに漆器資料が一括で大量に出土する場合がある。ところがこれらは、陶磁器と同様に江戸時代の人々の生活ぶりを直接理解する上で有効な「物的証拠」の一つではあるが、著しく脆弱な状態にあるものが多く、検出や調査、保存処理や保管環境の設定などの取り扱いに苦慮する場合が多い。かつ漆器資料は、陶磁器における古窯跡のような生産地遺跡も検出されにくい。そのため、これまで近世遺跡出土漆器資料の研究は、一部の状態の良い資料を肉眼観察するに留まる調査が多く、不明な点が多かった。ところがこれらは、用材利用（樹種と木取り方法）・漆塗り技法（下地の種類や塗り構造）・色漆の使用顔料や蒔絵材料等、材質や製作技法といった生産技術面には多くの属性があり、これらの品質は自然科学的なアプローチ方法で客観的なデータとしてとらえやすい。さらに各地の伝世資料や口承資料、塗師屋文書などの文献史料を用いた人文科学的なアプローチ方法による調査を併用することで、上記の属性別に明確な価格ランクの差があることなどがわかってきた（注1）。

しかし考古学をふくむ物質文化財を対象とする研究分野の限界でもあるが、資料の分析のみでは個々の器型の正式名称や用途などの基本的な資料自体の性格を把握するには不十分である。そのため近世考古学の場合、文献史学や民俗学等の関連諸科学の研究を援用することが通常行われる。すなわち近世遺跡出土漆器資料に関する本研究の次の調査段階は、これら個々の漆器資料を江戸時代時にはどのような食事形態の場で、どのような方法と目的で使用したかを明確に理解する必要がある。そのためには、やはり当時の状況を記録した文献史料、もしくは伝統的な内容を継承している民俗事例の調査を援用することが大切であると考え。さて、江戸市中や金沢城下町をはじめとする幾つかの近世遺跡出土漆器資料の中には、類似した松鶴亀のモチーフを蒔絵加飾もしくは赤色漆で加飾した漆器椀・蓋・腰高の資料群や、芙蓉もしくは桜の花弁と葉の意匠をモチーフとして赤色漆で加飾した椀・蓋・皿の資料群がある。本稿ではこれら2種類の漆器資料群を取りあげ、漆器の生産技術面から調査を行い、それぞれの一括性の有無を検討する。さらに、これらの食器としての性格を把握するために、これまで管見する機会に恵まれた「茶会記」や「茶書」などの食事目的が明確な文献史料を用いて、記載されている茶会席（懐石）食器（注2）としての近世漆器の様相を明らかにして出土漆器資料との関連性をみていきたい。

### 2. 出土漆器資料の調査

江戸時代には、全国的な経済・流通圏が発達したため、今日における伝統工芸・物産名産品の基礎をなす地方産業の多くが確立した時代でもある。本稿で取り上げる各種漆器についても大規模な生産地から地方の小規模漆器生産地に至るまで多くの漆器生産地が発達し、それぞれの需要に応じていたようである。一般的な消費地遺跡から各種日常生活什器類である陶磁土器類・木製品・金属製品などとともに

さて、本資料の樹種には、ブナ科ブナ属、カツラ科カツラ、ニレ科ケヤキ、トチノキ科トチノキ、トネリコ科シオジ、ハンノキおよびホオノキ材の広葉樹7種類が確認されたが、トチノキ材の占有率が極めて高かった（写真1～3）。この内、挽き物類の用材の木材的組織、工作の難易、割れ狂い、色光沢、塗り等を考慮に入れて分類すると（表3）に示すようになる。この結果を参考にして本漆器資料の用材の使用状況を見てみると、吟味された最優材であるケヤキ・シオジ材と、加工や入手の容易さという大量生産の点からみて一般性が高いと考えられる適材のトチノキ・ブナ材の2つのグループに分かれ、後者の比率が高かった（注3）。挽き物類の木取り方法は、横木地と堅木地に大別され、その大半は板目取りもしくは柂目取りの横木地であった。挽き物類である近世出土漆器の木取り方法は、堅木地に比較して横木地を用いる例が大半であり、堅木地の場合も木芯を外した材を利用する例が一般的である（図2）。これは木材の割れ狂い、収縮等を考慮に入れて漆器自体の品質を重視したため、不都合な木取り方法が自然淘汰された結果と考えている。本資料の木取り方法をそれぞれの樹種との関連性で見てみると、トチノキ材は横木地板目取りが、ブナ材は横木地柂目取りがそれぞれ優勢であった。一般にトチノキ材は、芯を中心にして割れ狂いの多い赤味（心材）が広がり、表皮に近い部分にシラタとよばれる白い部分（辺材）がある。シラタは、多く取れても四寸（約12cm）程度しか利用できないので、椀木地ではおのずと椀を伏せたような形で木地を取る板目取りの方法が適している。一方、ブナ材は芯に近いところまで利用が可能なので、木の狂いが少なく木地が多く取れる柂目取りの方法（ブンギリ）が適しているという口承資料がある（注4）。この点からも、本漆器資料の木胎製作の工程が、一貫してそれぞれ材の性質を考慮に入れた可能性が指摘された。

各漆器資料の漆膜面の塗り構造、特に各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、ピークがほとんど見出だされない資料と、粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料の2種類に分かれた。これらをさらに金属顕微鏡で観察することにより、前者は炭粉を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地、後者は細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）であると認識したが、前者の比率が卓越していた（注5）。地の漆塗り層は、いずれも1層塗りから3～4層塗りまで見出だされたが、一般的な単層塗り構造を持つ資料が中心であった（図3）（注6）。そして蒔絵および漆絵の加飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた（写真4）。

赤色漆の使用顔料は、定性分析と顕微鏡観察の結果、それぞれベンガラ（酸化第二鉄 $Fe_2O_3$ ）、朱（水銀朱  $HgS$ ）、の二種類の異なる赤色顔料を用いた赤色系漆であると理解した（図4）。ベンガラ・朱ともに赤色系顔料としての歴史は古い。しかし近世漆器の色漆顔料としては、幕府朱座を中心とした統制物資であった朱に比較して、江戸時代中期以降、人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラの方が廉価で一般的となるようである。本資料の場合も、ベンガラ漆を使用する事例が多いが、その一方でベンガラ漆を地内面に塗布するものの、地外面の松鶴亀文様には朱漆を用いるような顔料使い分けの事例も見出された（注7）。表面観察において金粉（金箔）によるとみられる家紋や絵柄等の蒔絵加飾部分を定性分析した結果、Au（金）が認められる資料は無く、いずれもAg（銀）やSn（スズ）、石黄（ $As_2S_3$ ；三硫化二砒素）等のそれぞれ異なる材質を用いた資料が見出だされた。また銀蒔絵の下絵漆に石黄を使用する事例も確認された（図4）。このことは、本資料の蒔絵加飾には金（Au）自体を用いる事例は見出し得ず、銀粉をはじめとする代用蒔絵材料が使用されていたことを示している。江戸期の各種文献資料からは、漆器に蒔絵や梨子地等の加飾を施すこと自体、寛文年間以降しばしば発せられる奢侈禁止令によって各社会階層毎に厳しく制限されていたこと（注8）や、これら金・銀・錫等の材質別の蒔絵漆器に、明確な価格差が存在したこと、などが知られる（注9）。

いずれにしても今回の生産技術面からみた本漆器資料の調査結果からは、松竹鶴亀の絵柄自体の定型化・類似性ともリンクするように、材質・技法もほぼ同様の品質を有する一連の資料群に属することも

片をカーボン台に取り付け、走査電子顕微鏡（日立製作所S-415型）に、エネルギー分散型電子線分析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザー：堀場製作所 EMAX-2000型）を連動させて用いた。分析設定時間は500秒とした。

#### 2.1.6 調査結果の集計方法

分析結果の集計方法は、個々の漆器資料からもっとも一般的な8つ（Aタイプ）もしくは9つ（Bタイプ）の材質や製作技法上の優劣ランクの項目を抽出し、それぞれの比率を総個体数の中で計算する。この結

確認された。そして近世遺跡出土の松鶴亀椀は、基本的には実用性を重視した漆器資料を中心としているが、その中ではやや優品に属することが理解された。

### 2.2.2 吉野椀

吉野絵が加飾された吉野椀資料は、いずれも内外面に黒漆を地塗りし、その地外面に特徴ある花卉文様の図柄を朱漆で加飾した一括セットと想定される漆器椀・蓋類である（図5）。そして近世遺跡出土の吉野椀資料は、いずれも江戸時代中期から後期に年代観が与えられるが、相対的にはその初現は前記の松鶴亀椀よりは年代的に新しく、相対的にも江戸時代後期から幕末期の資料が中心であった。前記したようにこの花卉文様は、漆工史の分野では、吉野山周辺（現在の奈良県吉野郡吉野町や下市町周辺）を中心に生産された近世吉野塗の特徴の一つである「吉野絵」と呼称される芙蓉もしくは桜の意匠を用いた漆絵図柄である。近世吉野塗の沿革を口承資料や文献史料から纏めてみると以下ようになる。まず江戸時代初期の寛永年間(1624-1643)頃に、小倉屋喜兵衛なる者がそれまで吉野山周辺で生産されていた漆器に改良点を多く加えて日用生活什器を中心とした漆器に吉野桜もしくは芙蓉模様（これらを吉野絵と呼称する）を赤色漆で描き、吉野の特産品としたことから始まるとされる。そして、二度の衰退や途絶をはさみ、大きく三期に生産の沿革はわけられる。すなわち第一期は、前記したような江戸時代前期の近世吉野塗の創出期である。この時期の吉野塗については、寛永15年(1638)の松江重頼『毛吹草』には、塗鉢や山折敷などの記述がみられる。第二期は一時衰退した漆器業を再興すべく、吉野山より春慶塗の技法を導入したとされる江戸時代中期頃とされる。正徳2年(1712)の寺島良安『和漢三才図会』の大和国土産には、塗挽盆が、また貝原益軒『和州巡覧記』には、塗物として「椀・折敷・曲物小樽など色々多し」とありこのころ漆器の器種が多様化したことが推察される。しかし天明の飢饉(1782-1787)により吉野山周辺地域も大きなダメージを受け、吉野塗生産地も一旦途絶を余儀なくされたようである。その後寛政年間(1789-1800)頃に吉田屋重兵衛らが回復を図り、やがて安政5年(1858)には虚空蔵講という漆器業者仲間が設立されて明治期以降へと受け継がれていく江戸時代後期頃の第三期である（大正8年刊『奈良縣吉野郡史料（中巻）』による）。いずれにしても吉野山周辺は蔵王堂金峰山寺の参拝や桜の名所として広く世間にも知られていたために、吉野塗も江戸時代当時の吉野産物の一つとしてあげられている（表4）。吉野山周辺地域は、良質な吉野漆の栽培、吉野紙（漆濾紙）の生産、良質で豊富な森林資源と中世以来の吉野木地師による轆轤生産の発達など、漆器生産には良質な原材料と生産技術に恵まれた、本来有利な土地柄である。この点が、近世吉野塗の創出・発展の背景となったことは十分に考えられる。しかし、紀州黒江塗や奥州会津塗などの他の近世漆器生産地が幕藩体制下における為政者側の主要な物産育成の対象となったこととは異なり、この地域の産業育成の対象はあくまでも良質な吉野漆樹液や吉野紙の生産である。すなわち、近世吉野塗は基本的にはあくまでも吉野山名所見物に伴う特産品の一つという側面を持っていたためか、江戸時代当時の生産規模はそれほど大きなものではなく、事実、時々の社会情勢や経済状態、天明飢饉などの災害などの影響を受けると、漆器の販路や生産体制自体がその都度途絶状態に陥っている。すなわち近世吉野塗は、生産基盤自体が小規模で不安定な一地方漆器生産地であったと考えられる。しかし、この吉野絵意匠は、大和名所であった吉野山をイメージするものとして、江戸時代中期以降には近世吉野塗を由来とする日常生活什器類ではなく、茶匠由来の茶会席食器の一つとして関西系の漆器生産地を中心に生産されたことも口承資料は伝えている。

これら近世遺跡出土の吉野椀資料の用材にはブナ科ブナ材やバラ科サクラ亜属、カツラ科カツラ材が使用されていたが、ブナ材の使用比率が高かった。これは、前記の松鶴亀椀とはやや異なる傾向である。漆膜面の塗り構造、特に、各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、ピークがほとんど見出だされない資料と、粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料の2種類にわかれた。これらをさらに金属顕微鏡で観察することにより、前者を炭

粉を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地、後者を細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）であると認識した。これらを個々の資料でみると、長崎市中の万才町遺跡（幕末期の高島周帆邸跡）出土資料や加賀藩家老本多家所蔵什器では一部サビ下地を用いているが、江戸市中の東京大学本郷構内遺跡や旧芝離宮庭園跡、金沢城下町の本町一丁目遺跡や安江町遺跡などの多くの資料の場合、基本的には炭粉下地の上に1～2層上塗り漆を塗布する実用的な漆塗り技法であった（図3）。本資料群を特徴づける赤色漆による吉野絵の図柄は、定性分析と顕微鏡観察の結果、それぞれベンガラ（酸化第二鉄 $Fe_2O_3$ ）、朱（水銀朱  $HgS$ ）、の二種類の異なる顔料を用いた赤色漆であると理解した（図4）。本資料群の場合、一般的なベンガラ漆を用いる資料もあるが、基本的には朱漆を用いる資料が多く、この点が一つの特徴となっている。意匠の加飾のタッチには絵漆の筆むらや筆がれが顕著に見いだされる資料も多く、これらが肉筆加飾であることがわかる。また、近世吉野塗との関連性が想定される吉野山周辺の伝世資料を中心とした一部の皿資料では皿外輪の縁取りの朱漆が半乾きの状態の時に皿を重ねたためか、地外面底側部にも朱漆が付着しており、これらがある程度量産的に生産された規格品漆器である資料を含んでいることを示している。いずれにしても、本漆器資料の材質および製作技法は比較的一括性が高く、基本的な組成傾向は類似していることがわかった。このような漆器資料が検出されたことは、当時の使用者の性格や文化性、物資流通の在り方を考える上でも興味深い結果を含んでいるといえる。

### 3. 文献史料の調査

前章では、江戸市中や金沢城下町関連の近世遺跡出土漆器資料のうち、特徴ある加飾意匠のデザインを有する地外面に銀蒔絵や赤色漆で松鶴亀の絵文様が加飾される松鶴亀椀と漆工芸の分野では吉野絵と呼称される芙蓉もしくは桜の花弁と葉の意匠が赤色漆で地内外面に加飾される吉野椀の2種類の漆器資料群について、材質や製作技法といった漆器の生産技術面を中心とした考察を行った。その結果、それぞれは一括性の高い資料群であることがわかった。

本章では、茶の湯行事に伴うというように、食器としての使用目的が明確な茶会席食器としての漆器資料について、江戸時代の文献史料を中心に調査し、先の出土資料との関連性を考察する。

さて、本稿で取り上げる文献史料は、いずれも茶の湯行事を行う上で参考となる手引書である。これらは、時代や性格によって「茶会記」と「茶書」の二種類に大別される。前者は、織豊期の近世初頭～江戸時代前期頃に千利休とその弟子達を中心として行われた各種茶会の記録（茶会記）である。このような具体的な茶会記録は、自他の茶会を行う際、茶会の式次第やそこで用いる茶道具、さらには茶懐石献立等を組み立てる上で参考とされたようである。その後の茶の湯は、千利休の「わび・さび茶」から「きれいさび」として古田織部・片桐石州・細川三斎など大名や一部の富豪町人らによって担われたが、千利休の百回忌にあたる元禄年間頃には、茶の湯の社会的な流行期があり、茶の湯はかなり広い階層にまで広がった。後者の茶書は、この元禄時代以降、遠藤元閑ら幾人かの茶匠により茶道の基本的な式次第や茶道具などを記述した手引書として刊行されたものである。このような茶書の刊行が、千家をはじめとする家元制度の整備もふくめ、地方へ、さらには広い階層へ、茶の湯を流布させる引金となったとされる（文献1）。以下、茶会記および茶書の内容を記す。

#### 3.1 文献史料としての茶会記および茶書

ここでは調査する機会に恵まれた文献史料5点（前2者は既刊図書からの抜粋、後3者は江戸期の茶書史料から重要と思われる部分の翻刻）を取り上げ、ここに記述された茶会席食器としての漆器類について、器型や寸法・塗り技法、さらには使用目的や方法を中心に纏めた。この理由の一つは、茶書や茶会

記等の茶の湯関連文献史料の研究はこれまでも比較的良好に取り上げられる題材であるが、案外翻刻された茶書の史料数は少ないこと。そして各論的に茶会席食器としての漆器資料にテーマを絞った論考はあまりみられない点、さらには食器としての漆器資料の使用法もしくは目的が極めて明確である点による。

### 3.1.1 天正18年(1590)『山上宗二記(酒井家本)』

本史料は、村田珠光・武野紹鷗・千利休へと繋がる茶の湯の秘伝を、利休の高弟である山上宗二が書きあらわした茶の湯関連史料である。今日へ繋がる近世初頭期の茶の湯の状況を知る上で代表的な文献史料であるため、これまで桑田(1957)をはじめ多くの研究がなされている(文献2)。この中には本稿が対象とする茶懐石食器としての漆器類について言及した箇所がある。以下重要と思われる部分を抜粋して掲載する。

紹鷗時ヨリ十年以前マテハ、金銀チリバメニノ膳、三ノ膳迄在 一 中略

一、当世は唐椀、鉢子、燕口

### 3.1.2 元禄9年(1696)『茶湯献立指南 卷之八』

本史料は、茶匠遠藤元閑が記述した多くの茶書の内、茶会席献立が詳細に記述された文献史料である。江戸時代の食文化の内、会席(懐石)献立を知る上で代表的な書物として、今日でもよく引用される(文献3,4)。この文献史料の後編には、「椀を漆塗りするの紋付け、黒塗り、折敷は栗色塗り」というごとく、茶会席に用いられる各種漆器の内、汁椀・吸物椀・平椀(皿)・壺椀(皿)等の器種別に塗り技法の注記で挿図として纏められている。元禄期頃の近世出土漆器資料を理解する上で参考となると考えられるので、以下に掲載する(図6)。

### 3.1.3 明和8年(1771)『茶道早合点 卷之下 会席道具類』

本史料は、千家の茶匠茶洛小山照士 珍河が、江戸時代における古今茶道の作法および茶道関連道具の一般を記した上下2巻本である。内容は、茶人系図から始まり、路地の図・茶室および茶室道具・釜師系図・茶碗・楽焼茶碗師系図・茶筌・茶巾等の各種茶道具の解説が続き、その後、会席道具類の一つとして本稿の主題である各種漆器椀類の内容が記載されている。実際に使用されるべき茶会席食器としての漆器椀類の記述が挿図入で記録されている文献史料は少ないので、当時の状況を知る上で参考となる(図7)。以下は、個々の漆器椀の記述(くずし字)を現代語に翻刻したものである。

汁椀は飯椀の形に準じ坪は平の形に準ず

一文字椀	黒ぬり	同じく	平
丸椀	黒ぬり	うるみ	朱ぬりもあり
遠州椀	黒ぬり		
面桶椀	うるみ	いろ朱ぬりもあり	
吉野椀	黒ぬり赤絵	芙蓉の花葉	赤絵の椀ともいう
あがり子椀	くろぬり		
碁筌椀	黒ぬり		
精進椀	くろぬり	朱ぬり燕口もあり	朱塗燕口とは縁黒きをいふ
葎椀	うるみいろ		
菓子椀			

をつぼ椀	朱にて蒔絵をかけば	をつぼ椀なり	銀粉にてかけば	喰初椀也
挽物食次	くろぬり			
縁高杯	朱ぬり			

### 3.1.4 文化13年(1816)『茶道筌蹄(卷之五)』

本史料は、千家の茶匠 如心斎天然の口授を川中不中が書留め、黙々斎稲垣休叟(啐啄斎宗左門下)が編注を行った茶書で全五巻からなる。内容は、千家茶道一般に関する作法および各種茶道具類の解説が記録されている。この内の第5巻に、(史料2)のような挿図入ではないが、茶会席に使用する各種漆器類が塗り技法も含めてかなり詳細に記述されているので、関連する部分を翻刻して掲載する。

食器付菓子器	利休形ハことごとく朱碗也	利休よ里黒碗を用る	朱にも兼用
黒塗丸椀	坪平付	大小とも	利休このみ
黒塗上り子	利休形	坪外蓋之内ふちとも有	平内ふち也
黒塗碁笥碗	黒塗一文字椀	坪平付大小とも利休形	
朱丸椀	坪平付黒つは免(め)	利休このみ	
吉野 椀	坪付	利休このみ	当茶碗といふハふよう也 蔦の花也 親わん 斗り碁笥底 坪は了々斎好 以前ハ上り子の坪平を用ゆ
面桶椀	利休形	何連もうるみ	外ふち 茶台斗坪平ハ丸椀をかりもちゆ
輪廣椀	朱黒つはめ	江岑の門人	利休形の菓子椀のみ和持いて 菓子茶のみ楽み し人なり 師に交時 江岑を正手に控え連し弥 汁菓子 碗に鰻汁を注ぎ 出されしを 江岑甚賞して坪を飯碗を好む 石に汁椀ハ菓子椀と同じ
精進碗	利休形	高台の内何連も黒し	平内ふち蝶子底黒豆子底黒 引珠皆朱會には 為の手附 飯籠にも用ゆ 折敷朱角切裏黒組し 坪ハなし
網絵椀	原叟好	紀州公より松平加賀殿へ被遣御仰の好也	朱黒にて網の絵坪同形 平同ふち
二の椀	汁わんより	少し小し	大平内蓋
吸物椀	二品	二ノ汁	わんより少し小し 喰物椀形 了々斎好
重箱	二重	九食籠	食次手なし
湯次	湯盆	破網	長用寸切
酒日連			
菓子盆	同形		
二枚盆			
杯台	同形二枚定		
折敷	啐啄斎	黒角不切の通りにす	朱つば免
糸目椀	如心斎好		
腰高	添壺盈半に用ゆ	外の席へも兼用	
平丸椀	一文字椀の内をかり用ゆ		
吸物椀	花む可し	黒丸わんの形にて	木地薄し
葎	仙叟好	朱糸底黒うるみハ	原叟好
喰物(初)椀	松竹梅鶴亀の絵ハ	利休形	夕顔の描情ハ 原叟
夕顔椀	仙叟好ハ	タタ夕顔の描情	
網の絵	小ハ原叟好	喰物椀形ハ	了(了々斎)好

ハタワリ	原叟好　うるみ煮物椀にかし　用ゆ
菓子椀	朱黒つは免（め）　利休形　煮物椀により　用ゆ
折敷	角きら須（す）　利休形の湯盆なり　給に用るハ仙叟より　膳に用る時ハ 曲折敷を湯盆に用もよし
鮑目	利休形た免（め）　角きり　かんな免（め）あり
曲	利休このみ　た免（め）角きり
朱	利休形　朱黒　つば免（め）　角きり
山	飛驒作にならふて利休好みなり　鮑目内は桜の皮とじ免（め）有 側源し打合せるなり
吉野	根来作也　鏡ハ黒はけめ　かい朱裏表慶　啐啄齋より吉野折敷といふ 吉野椀に　取合す　子家に本無何李（なり）
半月	如心齋好　一閑作　黒クルミ足　糸目椀に取合須
山崎盆	織部好タメ塗　鮑目　裏黒形丸 朱黒塗　朱平附黒平付
食次	何連も　利休形
網絵 食次	原叟好　手なし　杓子朱タメ
杓子	黒塗ハ黒飯次に用ゆ　朱ハ朱の飯次に用ゆ　黒手付　食次に添ハ形長し 重ハ朱手付に添　花火免也
湯次	黒塗湯の子スクイ添　利休形又重湯の子救有　重湯次は添と同じよう須 網絵ハ朱湯の子スクイ
同	唐重　朱杓子　添　利休形　元サハリ写しにて　禪家にては 銅撰といふて酒次也
酒次	塗　利休形内黒外溜サワラ木地
湯	利休好　極り
銚子 鍋	左ハ火にかけ爛をする器なりしを　織部より席上に用ゆ
丸 角	両方とも利休形黒塗蓋
糸 目	原叟好　道翁作蓋　三通り有共　蓋桐かたち下よかき　つまみ 両取て平渡付　宗入黒もちよき　つまみ　鉄無地　つまみ　同給
平	啐啄齋好　蓋手茶潤
黒	啐啄齋好　黒塗蓋　後　了々齋鉄蓋好添
塗	利休形　九潤溜の通り　鉄の上を　惣黒塗りにな須
盃	織部　椀の蓋にて酒を吞連しを　利休よしとして　銘々盃を好
銘々盃	利休このみ　朱ぬり
萩 絵	原叟好　大小高重子　朱刷毛目黒塗にて萩の描情
汜	原叟好　朱高重子　裏に黒にて　しわんを書く
飛 石	原叟好　汝部屋差次し　方にて　黒にて飛石をかく　連しを　合に 写し来る　朱一枚盃
杯 台	黒朱　利休形　黒ハ杯うけの糸輪あり　朱にハなし
楽焼重溜	
重網絵	二品とも啐啄齋好
八寸	杉木地　利休　このみ 桧木地　仙叟好

	溜 入子 大小 原叟好 な梨(り)
重箱	溜 利休形 桐木地 溜ぬ里 二重 又 同形に 黒塗何り 好みせたとなら須
網	原叟好 二重網の絵のわんに添
食 籠	八角丸 原叟好 一閑張る 二手とも 内朱外黒 八角ハかけこ有
朱 三重	一閑張 琉球切写し 外朱内黒 焼 青漆黄ぬ里り
面	原叟好 網の絵の椀に添 青 貝 堆 朱 何連も からもの
通 盆	黒 利休形 丸 一閑張 元淡好也 杉の木地 利休このみ 鏡遍き目
湯 盆	黒角きら須 利休形
溜	長角カンナメ カバトぢ 盈付き黒 仙叟好
一 閑	原叟好 長溜り 又 盈付黒
黒 丸	元泊好 今子家に不用
菓子盆	〇〇盆
南蛮	朝鮮 三脚盆 利休形朱盈付黒
八 角 盆	朱塗 黒御た免 如心斎好 元来 唐物写し也

### 3. 1. 5 嘉永4年(1851)『茶式湖月抄 三編下巻』

本史料は、茶匠湖月老隠による初編～五編各上下巻の合計10冊からなる詳細な茶道書である。本史料の特徴は、第三編下巻には目次に掲げるような茶会席に使用される各種漆器類が、詳細な寸法入で挿図されている点である。当時、規格品として各種漆器類の生産が行われていたことが、この文献史料からは伺える。以下、目次とともに各種器型毎の寸法の記述(くずし字)を(図8)の挿図と対照できるように現代語に書き改めたものを掲載する。

#### 目 次

文字椀 形寸法	同平皿坪皿寸法
丸椀形寸法	上り子椀寸法併平坪皿
面桶椀形寸法	碁笥椀形寸法
精進椀形寸法	同平皿坪皿寸法
同折敷寸法	吉野椀寸法
原叟好網椀	同平皿坪皿寸法
鮑目折敷寸法	曲折敷
不角切折敷	山折敷
山崎盆	仙叟好板折敷
葎吸物椀	菊画硯蓋
食次寸法併杓子	手食次併杓子
湯次寸法併湯子杓子	宗室好湯盆
盃台併仙叟好形	盃大小
酒次	縁高寸法
坪々透子桐二重	同下重



文字椀形 (内外黒花塗)

- 食椀 惣高；2寸3分、幅；4寸7分3厘、高台高；4分、厚；1分、幅；2寸2分
- 食椀蓋 惣高；1寸6分、高台高；3分2厘、内厚；1分、幅；2寸
- 汁椀 惣高；2寸1分半、幅；4寸5分半、高台高；4分7厘、内厚；1分、幅；2寸1分
- 同蓋 惣高；1寸5分、幅；4寸2分、高台高；3分3厘、内厚；1分、幅；1寸9分
- 平皿 惣高；1寸6分半～8分、幅；4寸4分～3分、高台高；3分1厘、厚；8厘、同幅；2寸1分、面；2分、幅；4分半
- 同蓋 惣高；1寸、幅；4寸7分、高台高；3分、同厚；7厘、同幅；1寸5分3厘
- 坪皿 惣高；2寸2分、幅；3寸8分3厘、高台高；3分半、厚；8厘、同幅；1寸8分5厘、面；6分3厘、ひも；6分半
- 同蓋 惣高；8分半、幅；4寸1分半、高台高；2分7厘、厚；7厘、同幅；1寸4分半

丸椀 (内外黒花塗)

- 食椀 惣高；2寸5分半、幅；4寸7分、高台高；外4分・内3分半、同厚；8厘、幅；2寸1分7厘
- 同蓋 惣高；1寸6分半、高台高；外3分・内2分半、内厚；1分、幅；2寸
- 汁椀 惣高；2寸1分半、幅；4寸6分半、高台高；外3分半・内3分、内厚；1分、幅；2寸3分
- 同蓋 惣高；1寸5分半、幅；4寸1分半、高台高；外2分半・内2分2厘、内厚；8厘、幅；2寸1分

上り子椀 (内外黒花塗)

- 食椀 惣高；2寸5分、幅；4寸4分半、高台高；3分7厘、同厚；1分、幅；2寸1分半
- 同蓋 惣高；1寸5分半、幅；4寸、高台高；2分3厘、厚；8厘、幅；1寸8分半、
- 汁椀 惣高；2寸1分7厘、幅；4寸2分、高台高；3分3厘、幅；1寸1分3厘、厚；8厘
- 同蓋 惣高；1寸2分、幅；1寸8分半、高台高；2分3厘、厚；7厘、幅；1寸8分
- 平皿 惣高；1寸6分半、幅；4寸4分、底の板；2寸1分、厚；8厘、
- 同蓋 惣高；1寸1分、幅；4寸1分9厘、高台高；1分3厘、厚；7厘、幅；1寸5分
- 坪皿 惣高；2寸4分、幅；3寸4分、高台高；3分1厘、厚；8厘、幅；1寸8分半
- 同蓋 惣高；8分2厘、幅；3寸6分、高台高；2分半、厚；6厘、幅；1寸3分

面桶椀 (内外黒花塗)

- 食椀 惣高；2寸4分半、幅；4寸1分半、高台高；4分、同幅；2寸1分、厚；8厘
- 同蓋 惣高；1寸2分2厘、幅；4寸5分半、高台高；3分3厘、同幅；1寸9分半、厚；7厘
- 汁椀 惣高；2寸1分、幅；3寸9分7厘、高台高；4分半、同幅；1寸9分半、厚；8厘
- 同蓋 惣高；1寸1分半、幅；4寸2分、高台高；3分、同幅；1寸7分半、厚；7厘
- 菜入 惣高；1寸7分、幅；3寸8分、高台高；3分3厘、同幅；1寸8分、厚；7厘
- 同蓋 惣高；1寸1分、幅；4寸、高台高；2分半、同幅；1寸8分、厚；7

碁笥椀 (内外黒花塗)

- 食椀 惣高；2寸3分、幅；4寸5分半、枝；2寸1分半、厚；8厘
- 同蓋 惣高；1寸6分半、幅；3寸9分半、高台高；2分半、同幅；2分半、厚；6厘
- 汁椀 惣高；1寸9分、幅；4寸1分半、枝；1寸9分、高台高；1分半
- 同蓋 惣高；1寸3分半、幅；3寸7分半、高台高；2分、同幅；1寸3分半、厚；6厘

精進椀 (内外黒花塗)

食椀	惣高；2寸6分半、幅；4寸8分半、高台高；外6分・内5分半、幅；3寸4分、厚；1分2厘
同蓋	惣高；1寸5分7厘、幅；4寸3分、高台高；外2分余・内3分、幅；2寸1分半、厚；8厘
汁椀	惣高；2寸4分半、幅；4寸4分、高台高；外4分半・内4分6厘、厚；1分
同蓋	惣高；1寸3分半、幅；4寸分半、高台高；1分7厘・内2分、厚；7厘
平皿	惣高；1寸8分、幅；4寸3分半、高台高；3分2厘、幅；2寸1分半、厚；1分2厘
同蓋	惣高；9分半、幅；4寸7分、高台高；2分7厘、幅；1寸2分、厚；1分2厘
坪皿	惣高；2寸5分、幅；3寸8分、高台高；3分7厘、幅；1寸9分、厚；1分
同蓋	惣高；9分、幅；4寸2分3厘、高台高；2分8厘、幅；1寸5分2厘厚；1分
吉野椀	(内外黒花塗、内外朱漆で芙蓉之絵有、朱で口縁いつかけ)
食椀	惣高；2寸2分、幅；4寸4分、底板；2寸分半、内の厚；1分半
同蓋	惣高；1寸6分半、幅；3寸9分半、高台高；2分、同幅；1寸8分、厚；2分
汁椀	惣高；1寸9分、幅；4寸1分8厘、底板；1寸9分、厚；1分2厘
同蓋	惣高；1寸3分半、幅；3寸7分、高台高；2分、幅；1寸7分2厘、厚；8厘
原叟好	網の椀 (惣皆朱黒蒔絵)
食椀	惣高；2寸2分5厘、幅；4寸4分半、高台高；3分、幅；1寸2分、厚；1分
同蓋	惣高；1寸5分5厘、幅；4寸1分、高台高；2分、同幅；2分、中深；1寸1分、厚；8厘
平皿	惣高；1寸8分、幅；4寸4分、高台高；2分8厘、同幅；2寸1分8厘、厚；8厘
同蓋	惣高；1寸、幅；4寸2分、高台高；2分、幅；1寸6分半、厚；8厘、中深；7厘
坪皿	惣高；2寸5分6厘、幅；3寸9分、高台高；3分、同幅；2寸、同厚；8厘、中深；2寸分半
同蓋	惣高；8分5厘、幅；3寸6分5厘、高台高；2分、同幅；1寸5厘、同厚；8厘、惣中深；5分
葎吸物椀	(内外共うるみ花塗・朱塗、宗室形内黒外朱底黒塗)
椀	惣高；2寸9分、幅；上ニテ3寸・下ニテ2寸7分、いと底幅；1寸5分5厘、同深；1分4厘、同蓋；2寸5分
蓋	惣高；3寸6分、糸底幅；1寸1分5厘、内法；1寸5厘、内法深；2分、ふちの内；3寸2分、同縁の幅；2分
仙叟好	朱之盃台 (内外朱花塗)
	惣高；1寸9分、底厚；2分半、口縁厚；7厘
酒盃	(内外朱花塗)
盃	惣高；8分、さし渡し；3寸8分、深；4分半、厚；7厘、高台径；1寸2分3厘、外径；2分8厘
大盃	惣高；1寸1分7厘、さし渡し；3寸8分、深；8分、厚；7厘、外径；2分4厘

### 3. 1. 6 年代別茶会記献立記録にみられる食器としての漆器類

(昭和11年『古今献立集』末 宗廣、他を加筆修正)

No.	茶会名	年代	漆器資料の記述名	(文献史料名)
1.	津田宗及茶会	天正2年(1574)	塗椀	(宗及日記)
2.	千紹安茶会	天正15年(1587)	木具足打、光明朱のたう椀、内赤のづつ(豆子)	

3. 今井宗及茶会 天正15年(1587)：本膳 角折敷 外梨子地内赤、内赤のたう椀、  
皆朱せがい皿、唐食箆 上に人形の絵あり置き  
あげたる光明朱也又其内青しつもあり、内朱の盆
4. 古田織部茶会 慶長元年(1596)：はたそり(端反)椀、赤具台、塗縁高 (松屋筆記)
5. 藪内劍仲紹智茶会 寛永 2年(1625)：黒の一文字椀 (松屋日記)
6. 藤重藤藏茶会 寛永11年(1634)：重箱 (松屋筆記)
7. 金森宗和茶会 寛永15年(1638)：鉢の子形の様なる黒椀、小さきめし椀、(料理沿革大概)  
五寸程の折敷椀
8. 片桐石州茶会 寛文 3年(1663)：膳 塗足打塗へき、大糸目蓋なし、鈴の鉢 黒塗  
(片桐家茶会料理献立の記)
9. 同 寛文 4年(1664)：塗盆(片桐家茶会料理献立の記)
10. 藤村庸軒茶会 延宝 9年(1681)：重箱 (料理沿革大概)
11. 同 元禄 8年(1695)：山折敷 漆にてさっと拭ひ上りこ椀青漆内溜塗 (料理沿革大概)
12. 原叟宗左茶会 元禄 7年(1694)：一文字椀
13. 治溪和尚茶会 寛永 3年(1626)：黒塗折敷、色絵椀 (料理沿革大概)
14. 近衛家照公茶会 享保10年(1725)：鮑目の一重の黒塗 蓋の裏に蒔絵あり、青漆の重箱、盆昔の形の  
由 黒塗にして裏より見て茶台の穴なき様のもの (槐 記)
15. 同 享保11年(1726)：御椀 内外朱にて角より糸底まで黒、御膳四角 四角みに反あり  
内に白粉にて波の模様 (槐 記)
16. 同 享保11年(1726)：食榨汁器宗和形高台大なり、膳春慶糸目、御坪皿 四角半分は  
朱半分は黒塗、盆一閑張内朱 (槐 記)
17. 深帝院茶会 享保 9年(1724)：膳 角の足打て縁の真中に一筋のひあり 朱膳の内黒し 足とも  
に角み切の角、御重箱 外春慶掛流し中黒 (槐 記)
18. 同 享保10年(1725)：膳 春慶の糸目縁裏溜塗の黒、椀黒、盆一閑張内朱縁黒 (槐 記)
19. 進藤刑部大輔茶会 享保 9年(1724)：塗湯次、だいはの重箱 (槐 記)
20. 上田養安茶会 享保 9年(1724)：御重箱、湯次塗物 (槐 記)
21. 松井主殿茶会 享保11年(1726)：汁椀 (槐 記)
22. 野田醉翁茶会 享保10年(1725)：折敷 三角黒椀青貝縁の縁あり 内少し蒔絵 (料理沿革大概)
23. 内本積雨茶会 享保12年(1727)：菓子椀 (中村任尺茶会記)
24. 同 享保13年(1728)：大縁高黒塗り、坪皿、(中村任尺茶会記)
25. 神尾左兵衛茶会 宝暦 7年(1757)：大平、坪 (白 鷺 洲)
26. 松尾宗政茶会 寛政 7年(1795)：角折敷、面桶椀、菓子椀、唐物盆 (料理沿革大概)
27. 川上不明白茶会 寛政 5年(1793)：溜塗 菓子椀、溜塗楽焼の二重 (料理沿革大概)
28. 松平不昧茶会 享和 2年(1802)：吸物膳 黄漆青漆、朱輪廣椀、盃 観世水 黒吉野絵朱葵、  
花鳥模様唐折敷、縁鉄刀木梨子地、くるみ足膳、葎形椀、盃 金海、盃盆 孔雀尾蒔絵  
梨子地小盆、提重、膳黒塗端反蒔絵梨子地竹模様椀、平皿、黒塗丸食次 黒塗杓子、  
こま手吸物椀、盃台 黒塗 引盃朱、梨子地竹模様湯次塗盆、青塗縁高 黒道志縁高、  
時代菊蒔絵鉢、青漆焼杉膳、青糸目上下朱椀、(松平不昧伝)
29. 同 文化 6年(1809)：坪、面桶椀、黒五葉盆、湯次黒 (不昧茶会記)
30. 同 文化10年(1813)：うるみ面桶椀 (不昧茶会記)
31. 玄々斎茶会 安政 5年(1858)：紅溜椀、不角切折敷、腰高 (玄々斎文庫)

### 3.2 茶会席食器としての漆器資料

以上、管見する機会に恵まれた近世各時期の文献史料から、茶懐石食器としての漆器資料についてみてきた。ここではさらに末宗廣『古今献立集』他の文献資料を参照して、各種茶会記の献立記録にみられる漆器の記述についても年代別にまとめた。その結果、茶会席食器としての漆器資料、とりわけ漆器碗類の年代別の推移がある程度推察された。

まず近世初頭期の茶懐石食器は、(史料1)にも「金銀チリバメ二ノ膳、三ノ膳迄在」とあるように、従来は東山文化の流れを汲む華やかな会席形式の献立と食器であったものを千利休が「わび・さび」を重視した懐石形式に改めたことはよく知られる。文禄2年(1593)『南方録』にも「飯碗・汁碗・蓋」とあるように、茶懐石道具としての漆器碗類は、禅宗などの精進料理形式に使用される寺社什器類を意識してか、足無膳に黒漆もしくは赤色系漆による地塗りのみの飯・汁碗に皿が付く簡素な四ッ碗形式が中心である。その後、腰高等の器種を加えながら、(史料2)にもみられるように江戸時代中期の元禄期頃には茶の湯の幅広い流行とも相まって、利休時代とは異なる幅広い器種(足付折敷の上に飯・汁・坪・平の四ッ碗および吸物碗・大平碗。引重と溜塗入子八寸、酒次、湯桶)と器型の多様化がみられる。また(史料3)をみると、少なくとも明和年間には今日の正式な茶会席食器としての漆器碗類で使用されている器型と名称が存在していたことが明確に理解された(図9)。ところで茶道具には、利休(千利休)好、石州(片桐石州)好等に代表されるような各種「茶匠好み物」と呼称される形式化された道具仕立てがある。茶会席食器としての漆器資料の場合、表千家六世覚々斎好の「網目会席家具」がよく知られる。本稿の文献史料では(史料4,5)でもそれらが登場しており、それ以外でも多種多様な漆器が存在していたことが、近世茶匠好み物の集計結果からもわかった(表5)。そして、このような茶匠好の漆器類は、利休(千利休：1522～1591)好・覚々斎(表千家6代原叟宗左：1678～1730)好・玄々斎(裏千家精中宗室：1810～1877)好の器種が比較的多いようである。今回は、それ以前の状況については明確ではなかったが、茶道具における茶匠好み物は、千家表・裏等それぞれの茶家流派の器型が決められていたとされる。さらに漆器碗利用についても、江戸時代後期には平碗・壺碗・菓子碗とともに子吸物碗・煮物碗などの器種も出そろい、『茶人つれつれ草』にも「清汁に内黒の碗はよくない。味噌仕立の汁に内朱碗はまたよくない。菓子碗は色々の場に応じて使いこなすことができるから、これを用意しておけばよい。」と規定するような、会席献立と漆器碗利用の定型化が時代とともに次第に進む様子が理解された。

### 3.3 文献史料からみた松鶴亀碗と吉野碗

前章では、管見する機会に恵まれた幾つかの茶書もしくはいずれにしても、「茶事」という目的が明確な食事形態の中では、好み物漆器と実際の出土漆器における器型や漆塗り技法との間に類似性が確認できれば、基本的なその漆器自体の性格が理解されるものと考えられる。

ここでは、近年報告例が増加している近世遺跡出土の松鶴亀碗にみられる一性格として、その使用目的と使用方法を中心に考察を加える。前記したように本資料にみられる最大の特徴は松竹鶴亀という縁起物・吉祥文様を地外面に加飾している漆器碗である。江戸時代の食事形態は極めて多様化しており、そこで使用される食器類との間にも「ハレ(会席・本膳形式)食と日常食」「個人食と共同食」等、両者には何らかの関連性が想定される。筆者はこれまで管見する機会に恵まれた各種文献史料、特に茶の湯に伴う食事形態であるという目的が明確な茶懐石(会席)に使用された漆器資料(注6)を中心に調査してきたが、以下の3史料には、松鶴亀碗および吉野碗という出土資料との関連性が想定される漆器碗(注7)に関する記述内容を見出すことができたので、その部分を再掲する。

(史料1) 明和8年(1771)『茶道早合点 卷之下 会席道具類』

をつぼ椀 朱にて蒔絵をかけば をつぼ椀なり 銀粉にてかけば 喰初椀也  
吉野椀 黒ぬり赤絵 芙蓉の花葉 赤絵の椀ともいう

(史料2) 文化13年(1816)『茶道筌蹄 (卷之五)』

喰物(初) 椀 松竹梅鶴亀の絵ハ 利休形 夕顔の描情ハ 原叟  
吉野椀 坪付 利休このみ 当茶碗といふハふよう也 鶯の花也 親わん 斗り碁筌底  
坪は了々斎好 以前ハ上り子の坪平を用ゆ  
吉野 根来作也 鏡ハ黒はけめ かい朱裏表慶 啐啄斎より吉野折敷といふ  
吉野椀に取合す 子家に本無何李(なり)

(史料3) 嘉永4年(1851)『茶式湖月抄 三編下巻』

吉野椀(内外黒花塗、内外朱漆で芙蓉之絵有、朱で口縁いっかけ)

食椀 惣高; 2寸2分、幅; 4寸4分、底板; 2寸(数字抜けか)分半、内の厚; 1分半  
同蓋 惣高; 1寸6分半、幅; 3寸9分半、高台高; 2分、同幅; 1寸8分、厚; 2分  
汁椀 惣高; 1寸9分、幅; 4寸1分8厘、底板; 1寸9分、厚; 1分2厘  
同蓋 惣高; 1寸3分半、幅; 3寸7分、高台高; 2分、幅; 1寸7分2厘、厚; 8厘

さて、本稿で取り上げる松鶴亀椀は、覚々斎(表千家6代原叟宗左: 1678~1730)好および又玄斎(裏千家一燈宗室: 1719~1771)好として文献史料にその記述がみられる。覚々斎(表千家6代原叟宗左)は、元禄時代~享保年間頃に活躍した茶匠であり、8代将軍徳川吉宗が紀州藩主時代から交流があったことも知られる人物である。覚々斎が活躍した初期の元禄年間頃は、千利休の百回忌にも当たり、その後彼が活躍した享保年間頃には茶の湯は社会的な流行でかなり広い社会階層にまで広がる。茶書は、この元禄時代以降、遠藤元閑ら幾人かの茶匠により茶道の基本的な式次第や茶道具などを記述した手引書として刊行されたものであるが、このような書物の刊行が、千家をはじめとする家元制度の整備もふくめ、地方へ、さらには広い階層へ、茶の湯を流布させる引金となったとされる。いずれにしても文献史料にみられる松鶴亀椀はまさにこの時期に生み出された茶匠好物の一つであり、伝世資料としての覚々斎好椀の代表的な資料は、茶道十式の内の漆芸中村宗哲7代(元禄年間)作の茶会席食器としての具体例が存在している。このことから、茶会席食器としての松鶴亀椀は、口承資料が示す表千家6代覚々斎(原叟宗左)や裏千家又玄斎(一燈宗室)らの千家茶匠が活躍した元禄時代を中心とした17世紀後半から18世紀前期頃に一般化したものであると考える。それではこのような松鶴亀椀はどのような使用をされてきたのであろうか。この点に関する民俗事例を調査した結果、二通りの使用方法が確認された。一つは(史料1)の記述内容にもあるように、茶会席における初喰椀(正月の初釜茶会の食器類の一つ)として使用される事例である。もう一つは茶の湯に伴う食事形態ではないが、松鶴亀の吉祥文様を加飾した漆器椀を正月の雑煮椀として使用する場合である。いずれにしても近世遺跡出土の松鶴亀椀と同様のモチーフを有する漆器椀類は、初釜などの茶事に伴う茶会席食器であるとともに、これが一般化した今日の民俗事例としては正月という新しい年明けを祝うハレの場の食事形態に雑煮椀などとして使用される食器であることがわかった(図1)。

一方、吉野椀についても各種茶書は、器型や塗技法、加飾意匠のデザインなどが具体的に記載されている。すなわち吉野椀は、黒漆で内外面を地塗りし、芙蓉の花葉を赤色漆で加飾、さらには口縁部分を朱漆で縁取りする親椀、坪椀、平椀などの茶会席食器であり、吉野膳とセットで使用するとある。これは、前章で取り上げた近世遺跡出土の吉野椀とほぼ同様の塗技法および加飾技法であり、両者の関連性が指摘されよう(図5)。そして各種茶書の文献史料によると、この吉野椀自体は千家初代の利休

(1522-1591)好み、坪椀は了々齋(表千家9代:1775-1825)好み、啐啄齋(表千家8代:1745-1804)の時代からセット関係のある折敷を吉野折敷と呼称したとしている。さて、吉野椀の意匠の特徴である芙蓉の花弁を加飾する吉野絵の起源は、江戸時代初期の近世吉野塗創設期に由来するという口承資料があることは前記した通りであるが、通常茶匠好み物の茶道具は、歴代の茶匠自らが好み物を設定したようである。しかし、この吉野絵意匠は、大和名所であった吉野山をイメージするものとして、以前から存在していた近世吉野塗由来の意匠を新たな年代に茶匠由来の茶会席食器の一つとして組み込んだことが、吉野椀を最も古い年代の千家初代の千利休好みと伝える由縁であろう。そして、実際には茶会席食器として吉野椀は、やはり口承資料が示す表千家8代啐啄齋や同9代了々齋らの千家茶匠が活躍した18世紀後半の江戸時代中期以降に一般化したものであると考える。

#### 4. 考察

以上、本稿では近年資料数が急増しているにもかかわらず、調査研究や基本的な取り扱いに苦慮するケースが多い近世遺跡出土漆器資料のうち、絵柄のモチーフや加飾技法に一括性の高いと想定された松鶴亀椀と吉野椀について、名称や使用方法など、基本的な食器としての漆器資料の性格の調査を行った。この調査は、個々の漆器資料の材質や製作技法といった生産技術面についての自然科学的なアプローチ方法を用いた分析を行い、併せて茶事にともなう茶会席食器という使用目的が明確な漆器資料について茶会記や茶書などの文献史料や口承資料などを用いた人文科学的なアプローチ方法により、江戸時代当時の状況を把握するものである。その上で両者の関連性について検討を行うこととした。

まず、調査を行った松鶴亀椀は、木胎にはトチノキ材を用い、炭粉下地に上塗り漆を一層施すといった実用的な漆塗り技法、ベンガラ漆、銀蒔絵粉や錫蒔絵粉・石黄漆の代用蒔絵材料を用いる例が大半であり、実用的で一般的な漆器資料の範疇に入るものの、近世遺跡出土漆器資料全般から見ると、実用的ではあるもののその中でもやや優良な材質・技法からなる基本的には同一産地になる一括資料である可能性が示唆された。文献史料や民俗事例などを考慮に入れると、これら松鶴亀椀は、元禄～享保年間に京都の茶道表千家6代の覚々齋(紀州徳川家との関係が極めて深い)が好んだという地外面に銀蒔絵や赤色漆で松鶴亀の絵文様を加飾する「覚々齋好」とよばれる茶会席食器としての漆器資料であること。そしてこれらは正月茶事初釜の初喰椀もしくは坪椀として使用された可能性が高いことがわかった。事実、各地の近世遺跡出土の松鶴亀椀の初現時期は、江戸時代前期後葉から江戸時代中期にかけての元禄年間頃あたり、その後一般化する傾向が見られ、本資料の性格を考える上でも参考となろう。なお、今後さらに調査を進める必要があるが、松鶴亀椀と縁の深い茶匠の覚々齋は、元禄年代以降には紀州徳川家と極めて関係が深い人物である。さらに今回の調査結果からは、近世遺跡出土の松鶴亀椀は基本的には同一産地になる一括資料である可能性が示唆された。この点を考慮に入れると、当時全国的にも大規模漆器生産地として江戸市中にも大量の漆器を供給しており、かつ漆器椀・蓋類の用材としてトチノキ材を多用していた紀州藩領内の紀州黒江塗を中心とした畿内系の漆器生産地が、これら茶会席食器としての松鶴亀椀の生産に何らかの形で関わった可能性を現在想定している。

一方、吉野椀については、その意匠が近世吉野塗の特徴を有するため当初は、大和吉野山周辺で生産されていた近世吉野塗自体であることが想定された。ところが実際の近世吉野塗は、生産地の沿革から概観すると、基本的にはあくまでも吉野山名所見物に伴う特産品の一つという側面を持っていたため、江戸時代当時の生産規模はそれほど大きなものではなく、時々の社会情勢や経済状態、天明飢饉などの災害などの影響を強く受けると、漆器の販路や生産体制自体がその都度途絶状態に陥るような生産基盤が小規模で不安定な一地方漆器生産地であったと推察される。その一方で、この吉野絵意匠は、大和名所であった吉野山をイメージするものとして、江戸時代中期以降には茶匠由来の茶会席食器の一つと

して、茶会席用の漆器の加飾図柄として吉野絵の意匠を導入して京漆器など関西系の漆器生産地を中心に生産されたことも口承資料は伝える。そして、管見される茶書にも茶匠好みの茶会席食器である漆器資料の一つとして吉野碗に関する記述は多く見られた。この点を考慮に入れると、江戸市中や金沢城下町、徳島城下町や長崎市中などの各地で検出される吉野絵の芙蓉意匠が加飾された碗・蓋・皿類の出土漆器資料は、実際に吉野山名所見物に伴う観光土産として各地にもたらされた近世吉野塗ももちろん希少的には存在しようが、その多くは、やはり江戸時代中期以降の千家茶匠好みの一つとして吉野絵の芙蓉意匠を取り入れて茶会席食器として生産・使用された漆器資料群であると理解している。茶会席食器として吉野碗は、表千家8代啐啄齋や同9代了々齋らの千家茶匠が活躍した18世紀後半の江戸時代中期以降に一般化したと考えるが、事実、近世遺跡出土の吉野碗資料は、いずれも江戸時代中期から後期に年代観が与えられ、相対的にも江戸時代後期から幕末期の資料が中心であった。そして、材質や製作技法といった生産技術面からみた個々の漆器資料の品質ランクの違いは、経済的もしくは文化的背景を含むこれら茶会席食器を調達して使用したであろう消費者側の性格の一側面をある程度反映したものであると想定された。

いずれにしても、松鶴亀碗・吉野碗の2種類の意匠に特徴のある近世遺跡出土漆器資料群は、生産技術面からみた調査により品質程度の差はあるものの、それぞれ基本的には一括性の高いものであった(注10)(図10)。併せて行った茶道関連の文献史料及び口承資料の調査の結果、いずれもこれらは茶会席食器としての漆器資料として歴代の茶匠好みの資料群であると理解した。すなわち、これらは元禄年代以降急速に一般化した茶道との関連性が指摘される資料群であり、これらを調達して使用した人々の性格の一端が理解されよう。なおこのうちの吉野碗資料群は、当初いずれも大和吉野山周辺で生産されていた近世吉野塗に由来の可能性を求めたが、今回の調査結果からは近世吉野塗ももちろん希少的には存在しようが、その多くは茶会席食器として生産・使用された漆器資料であると理解するに至った。

今後は、さらに多くの個々の近世遺跡出土漆器資料に関する分析調査を行うとともに、基礎的な文献史料の収集を図り、より実際の近世漆器の使用面からみた性格を考えていきたい。

#### (謝辞)

金沢大学埋蔵文化財調査センターには本稿を発表する機会を与えていただき本当にありがとうございました。また本調査を行うにあたり、東京都埋蔵文化財センター、東京都遺跡調査会、東京都港区立港郷土資料館、東京都新宿歴史博物館、東京都千代田区四番町資料館、東京都墨田区教育委員会、金沢大学埋蔵文化財調査室、金沢市埋蔵文化財センター、徳島県埋蔵文化財センター、高知県埋蔵文化財センター、長崎市教育委員会をはじめとする諸機関・諸氏(個人名は省かせていただきます)には近世遺跡出土漆器資料の調査で大変お世話になりました。そして茶会席食器関連文献史料の調査を行うにあたり裏千家茶道資料館には大変な便宜を図っていただきました。併せて謝意を表します。

なお本報は、平成11～14年度文部省科学研究費基盤研究(C)『近世蒔絵材料の劣化現象の把握とその保存に関する基礎的研究(研究代表者:北野信彦)』の成果の一部を含む。

#### (注)

- (1) 北野信彦(1993)「日常生活什器としての近世漆器碗の生産と消費」『食生活と民具』p.81-101、日本民具学会編 雄山閣出版、北野信彦(2000)「生産技術面からみた近世出土漆器資料の生産・流通・消費に関する諸問題」『日本考古学 第9号』p.71-96、日本考古学協会、吉川弘文館、などを参照されたい。
- (2) 茶事に関連する食事献立は、故事によると通常「茶懐石」の文字が当てはまる。しかし実際の江戸時代の文献史料では、宴会食的な意味も含んで「会席」の文字が使われる場合が多い。本稿ではこの点を考慮に入れて、

「懷石」の意味も含みつつ「会席」の文字表示を採用した。

- (3) 末沢 (1975) の調査では、近世以降のろくろ挽き物である漆器類の用材には、早晚材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材ではあるが靱性がある材を適材であるとしている。

橋本鉄男 (1979) 『ろくろ ものと人間の文化史31』 法政大学出版局

北野信彦 (2000) 「近世出土漆器碗の用材に関する一考察」『考古学と自然科学』日本文化財科学会、等を参照されたい。

- (4) 須藤 (1982) の調査によると、近世以降の近江系 (小椋谷) 木地師による挽き物類の木取り方法の場合、横木地板目取りはトチノキ地帯に、同柁目取りはブナ地帯に定着し、その細かい技術は、個々の集団に受け継がれてきたとしている。

須藤護 (1982) 『日本人の生活と文化、暮らしの中の木器』日本観光文化研究所編 ぎょうせい

- (5) サビ下地を用いた漆器の生産自体は、『延喜式』の俵漆技法をみるまでもなく、その歴史は古い。しかしその生産体制が地方の漆器生産においても普及・一般化するのには、漆器の需要とそれに伴う漆器生産量が増大化した江戸時代後期～幕末期以降のようである。この状況を知る事例として、近世輪島塗の台頭や、炭粉下地による廉価な日用漆器の生産では奥州会津、近江日野とともに三大生産地の一つといわれていた紀州黒江生産地へのサビ下地 (堅地物) 技術の導入などがあげられよう。なお一部の資料については細かい粘土や珪藻土をにかわ等に混ぜて用いる泥下地 (堅下地・本下地より堅牢性に欠ける) の可能性もある。しかし出土資料のにかわと生漆の明確な科学的識別が技術的に困難な現在、両者をまとめてサビ下地とした。

北野信彦 (1993) 「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・I -文献史料からみた量産型漆に使用する混和剤を中心として-」『古文化財の科学 第38号』P65-79、古文化財科学研究会

- (6) このような近世漆器の製作技法の在り方を示す民俗事例の1つに、新潟県糸魚川市大所の小椋丈助氏による実用に即した近世木地師、漆器碗の製作技法に関する口承資料がある。それによると [上品] 布着せ補強 (碗の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く) ～サビ下地 (砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布) ～下塗り (生漆) ～上塗り (生漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆) の工程をふみ、人一代は持つ堅牢なもの。[下品] 炭粉下地 (柳や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地) ～上塗り (生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物を多く混入している粗悪な漆)。[中品] 下品とほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆を濃く塗布したりミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い。などとしており、各漆器ランク別の工程をよく示している。

文化庁文化財保護部編 (1974) 『木地師の習俗 民俗資料選集2』 国土地理協会

- (7) 江戸時代における朱とベンガラの価格表を検討してみると、江戸時代前期段階には両者海外輸出品が多いため、相対価格差はほとんど見られない。しかし江戸時代後期頃の段階では、両者に約30倍ほどの相対価格差が見られ、とりわけ朱の高価さと入手困難さが指摘される。

北野信彦 (2000) 「ベンガラ 項目」『日本民俗大辞典 (下巻)』福田アジオ編、吉川弘文館

- (8) 江戸時代前期から徐々に定着化しつつあった雑道具類について、享保20年 (1735) の尾張名古屋城下町の町衆に対する禁令には、「一、同諸道具、梨子地ハ勿論、蒔絵無用ニ可仕候、上之道具 たりとも、黒塗ニ可仕候。(名古屋 叢書第三巻)」という記述がみられる。又、武家社会内部でも万治3年 (1660) の紀州徳川家 (御家中祝言道具達) では、藩士のランクを1万石から200石までの8段階に分け、道具揃や仕様を細かく規定している。その上で漆器である貝桶は2400石以下の者には調達が認められておらず、諸道具の蒔絵仕上げも同様に許されていない。(南紀徳川史 法令制度第四)

- (9) 寛延四年 (1751) の『名古屋諸色直段集、寛延四未年小買物諸色直段帳』には、漆器の休漆技法別の価格が記載されている。この史料では、布着せ蠟色塗 (上品) : 常溜塗 (中品) : 常拭漆塗 (下品) の相対価格差は、約51 : 3.4 : 1と算定される。また、伊勢菰野藩土方家菩提寺である見性寺の見性寺文書には、伊勢桑名の塗物商ぬし興に提出させた見積書があるが、それによると家紋加飾に使用された金・銀・錫粉蒔絵の相対価格比率は、



約18:6:1と算定される。いずれの事例からも生産技術面（ここでは材質や製作技法）の違いにより、漆器には明確な価格差が存在したことが理解される。

北野信彦・肥塚隆保（2000）「近世出土蒔絵漆器の材質・技法に関する調査」『考古学と自然科学第38号』p67-92、日本文化財科学会

- (10) ここでは、本稿が調査対象資料としている松鶴亀椀・吉野椀と同様に近世遺跡出土漆器資料の内でも、加飾意匠や漆塗技法に一括性が高いことが観察される東北系の漆器資料である(1) 江戸時代前期頃に奥州南部藩領内浄法寺周辺で生産されていたが、その後の奢侈禁止令等の影響で御留品として一般には調達が厳しく制限される、菱形金箔模様および雲型・菊花弁葉絵文様の意匠を持つ「南部箔椀」資料群、(2) 江戸時代後期頃に奥州会津生産地で人造石黄の製法が開発されるのに即応して生産が開始される地内面にはベンガラ漆を塗布するが緑色漆を地外面に塗布され、金自体を使用した加飾文様も施される資料もある「緑色椀」資料群の2つも比較参考資料として加えた。なお、緑色漆の製法は石黄の黄色と植物藍（インジゴ）の青色を漆に混入して緑色の発色を得る漆工技術であり、緑色椀に金自体を使用した加飾を行い得る理由の一つには、江戸時代の金箔は幕府統制物資の一つであり、その製造も、江戸・京都の幕府直轄地以外は、基本的には尾張名古屋（尾張徳川家）・会津若松（松平家）・仙台（伊達家）の三箇所のみにはしか許可されていなかったことによる。一方、近世南部箔椀の生産は、江戸時代前期頃には既に盛んであり、寛永15年(1638)の松江重頼『毛吹草』にも全国主要漆器生産地の一つとして陸奥薄（箔）椀・薄（箔）盆として、その名がみられる。箔椀は、寛永21年(1644)の盛岡藩の正式藩政記録である『雑書』によると、御留物（秋田藩等の他領への禁輸品目）の一つに掲げられており、貞享元年(1684)の『浄法寺塗物他領出証文』にも「箔絵之塗物一切出申間敷事」という記述がみられる。このことから、南部箔椀が盛岡藩専売品目の一つとして認識され、ある程度藩上層部は特別な漆器であると認識していたことがわかる。しかしその後の箔椀生産自体は会津塗生産地に移行したようであり、当地での箔椀生産は途絶したため現在では詳細は不明の点が多い。なお、現在の伝統的漆器産業品の一つである秀衡椀は、この意匠を模倣したものであり、近世南部箔椀との直接的な技術的つながりはない。

下出積興1979『加賀金沢の金箔』北国出版社

#### （参考文献）

- 1、 茶道（1956）『茶道古典全集』淡交社
- 2、 桑田忠親(1957)『山上宗二記の研究』河原書店
- 3、 村井康彦(1982)『和食の歴史』
- 4、 林屋辰三郎、横井清、榎林忠男 編注（1972）『日本の茶書 1, 2』東洋文庫 201, 206 平凡社
- 5、 沢口吾一（1966）『日本漆工の研究』美術出版社
- 6、 灰野昭郎（1985）『漆工（近世編）日本の美術 8 第231号』至文堂
- 7、 光芸出版社編（1978）『うるし工芸辞典』
- 8、 大手前女子大学史学研究所編(1983)『大坂城三の丸跡2』
- 9、 東京都港区教育委員会(1988)『増上寺子院群 光学院・貞松院跡・源興院跡』
- 10、 愛知県埋蔵文化財センター(1992)『朝日西遺跡』
- 11、 北野信彦（2001）「文献史料からみた茶会席漆器としての近世漆器資料」『久保和士君追悼考古論文集』p. 177-194、久保和士君追悼考古論文集刊行会
- 12、 北野信彦（2002）「近世遺跡出土の松鶴亀蒔絵漆器椀にみられる一性格」『もの・モノ・物の世界- 新たな日本文化論』p. 381-396、雄山閣

(引用文献)

江戸市中遺跡出土の個々の漆器資料の分析結果は、既刊の下記発掘調査報告書の項目を参照されたい。

北野信彦 (1992) 「出土漆器資料の製作技法」『細工町遺跡』 p. 163-173、新宿区厚生部遺跡調査会

北野信彦・高山優 (1993) 「近世寺院跡遺跡出土漆器資料の一性格」『研究紀要2』 p. 1-66、

東京都港区立港郷土資料館

北野信彦 (1993) 「栄町遺跡出土漆器資料の製作技法」『栄町遺跡』 p. 79-83、長崎市遺跡調査会

北野信彦 (1995) 「出土漆器資料の製作技法」『和田倉遺跡』 p. 134-139、千代田区教育委員会

北野信彦 (1995) 「出土漆器の製作技法」『丸の内三丁目遺跡』 p. 1-18、東京都埋蔵文化財センター

北野信彦 (1996) 「第2節、出土漆器資料の製作技法」『墨田区錦糸町駅北口遺跡・1』 p. 303-311

墨田区錦糸町駅北口遺跡調査団

北野信彦 (1996) 「2、出土漆器資料の製作技法」『溜池遺跡』 p. 161-191、東京都都内遺跡調査会

北野信彦 (1997) 「出土漆器資料の製作技法」『汐留遺跡 I』 p. 87-137、東京都埋蔵文化財センター

北野信彦 (1997) 「第2節、出土漆器資料の材質と製作技法」『溜池遺跡』 p. 31-44

地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会

北野信彦 (1998) 「伊勢菰野藩土方家屋敷跡遺跡出土漆器資料の材質と製作技法」

『港区文化財調査収録 第4集』 p. 79-111、東京都港区教育委員会

北野信彦 (1998) 「出土漆器の材質と製作技法」『丸の内一丁目遺跡』 p. 180-191

日本国有鉄道清算事業団/千代田区丸の内1-40遺跡調査会

北野信彦 (1999) 「東京大学本郷構内遺跡出土漆器資料の材質と製作技法」

『東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要2』 p. 289-307 東京大学埋蔵文化財調査室

北野信彦 (2000) 「出土漆器資料の製作技法」『汐留遺跡 II』 p. 299-308、東京都埋蔵文化財センター

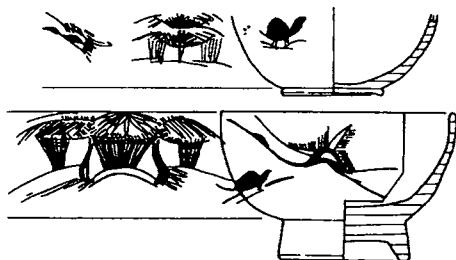
北野信彦 (2000) 「記念館前遺跡出土漆器碗の材質と製作技法」『明治大学記念館前遺跡』 p. 237-254、

明治大学考古学博物館

北野信彦 (2000) 「出土漆器資料の材質・技法」『小石川牛天神下』 p. 951-969、東京都内遺跡調査会

北野信彦 (2002) 「出土漆器の材質と製作技法」『飯田町遺跡』 p. 234-245、

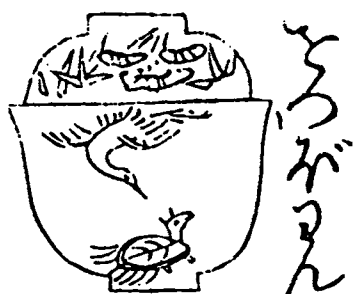
日本国有鉄道清算事業団/千代田区飯田町遺跡調査



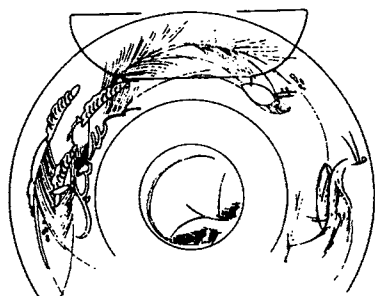
①清洲城下町関連遺跡



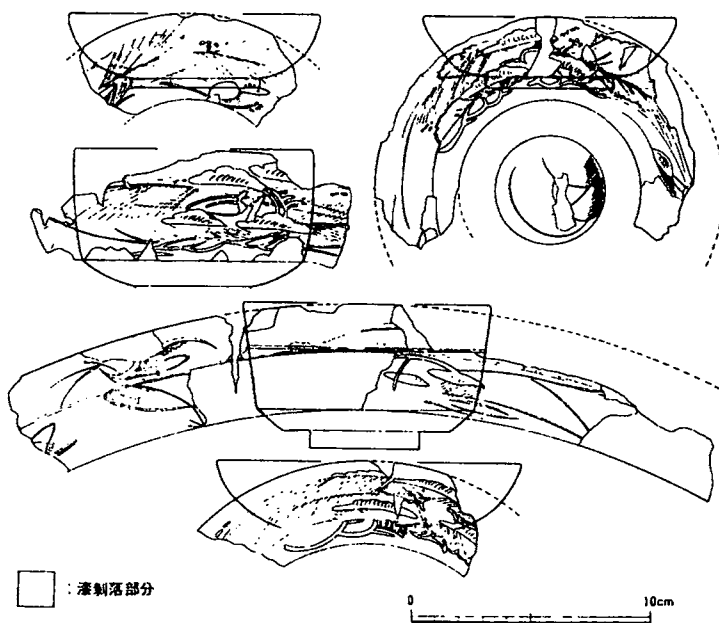
②大坂城三の丸跡



③『茶道早合点』(明和8年 1771)より

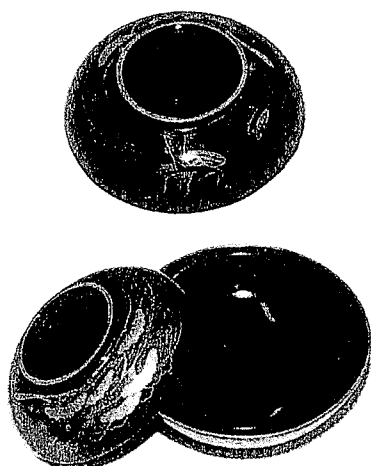


旧芝離宮庭園

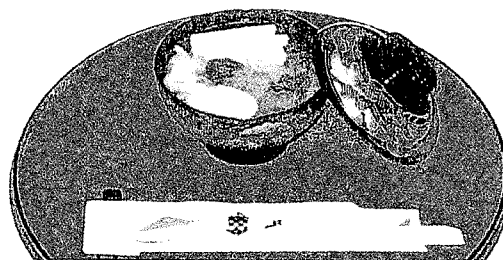


④各近世遺跡出土松鶴亀椀

芝増上寺子院群跡



⑤今日における茶会席食器としての覚々斎好の松鶴亀椀



⑥今日における正月雑煮椀の一例

図1 松鶴亀椀の器型と加飾意匠

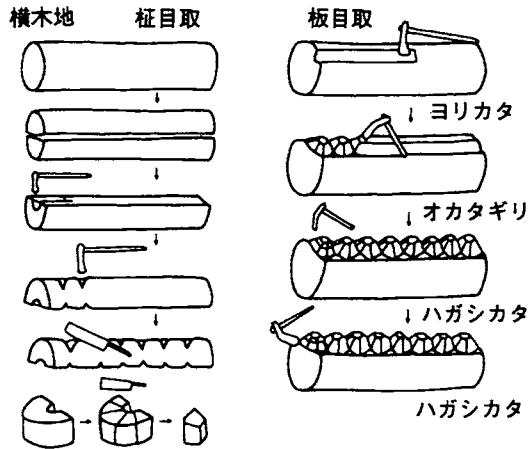
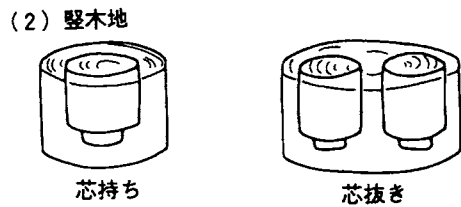
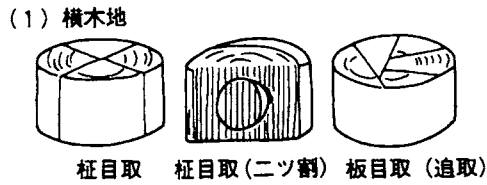
表1 松鶴亀椀観察表 松竹鶴亀椀比較一覧

遺跡名	器形	樹種	木取	表面塗り技法			使用顔料			漆塗構造		遺跡の性格
				内	外	文様	内	外	文様	内	外	
芝増上寺子院群	椀	トチノキ	A	赤	茶	外一絵一脱色	ベンガラ		Ag	I	II	寺院跡
	椀	トチノキ	A	赤	茶	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	茶	外一絵一脱色	ベンガラ	Ag	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	茶	外一絵一脱色	ベンガラ	Ag	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	茶	外一絵一脱色	ベンガラ	Ag	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	茶	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	茶	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	茶	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	茶	外一絵一脱色	ベンガラ	Ag	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	茶	外一絵一脱色	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
三栄町	椀	ホオノキ	A	赤	黒	外一絵一金	ベンガラ		Sn	I	II	町屋跡
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
	椀	トチノキ	B	赤	黒	外一絵一金	ベンガラ	Sn	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一金	ベンガラ	Sn	I	II		
細工町	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ	多層	多層	町屋跡	
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一銀	ベンガラ	Ag	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	朱	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	朱	I	II		
土方家屋敷跡	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	朱	I	II	大名藩邸	
	腰高椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一脱色	ベンガラ	Ag	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一脱色	ベンガラ	Ag	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一脱色	ベンガラ	Ag	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	朱	朱	I	II		
	腰高椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	朱	I	II		
	腰高椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一脱色	ベンガラ	Ag	I	II		
	腰高椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一脱色	ベンガラ	Ag	I	II		
	腰高椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一脱色	朱+ベンガラ	Ag	I	II		
	椀	シオジ	B	赤	黒	外一絵一赤	朱	朱	III	IV		
	椀	ケヤキ	B	赤	黒	外一絵一赤	朱	朱	III	IV		
	蓋椀	トチノキ	B	赤	黒	外一絵一赤	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ	I	II		
	椀	トチノキ	B	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
	椀	トチノキ	B	赤	黒	外一絵一脱色	ベンガラ	Ag	I	II		
腰高椀	トチノキ	B	赤	黒	外一絵一脱色	朱+ベンガラ	朱	I	II			
椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一脱色	ベンガラ	Ag	I	II			
椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一脱色	ベンガラ	Ag	I	II			
尾張藩市ヶ谷邸	椀	膜面のみ	一	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	朱+ベンガラ	I	II	大名藩邸	
尾張藩麹町邸	飯椀	トチノキ	B	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	朱	I	II	大名藩邸	
和田倉	椀	トチノキ	B	赤	黒	外一絵一銀	ベンガラ	Ag	I	II	役所跡	
港区No.19	飯椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	朱	I	II	旗本屋敷	
三田台町	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ	I	II	町屋跡	
溜池(千代田区)	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ	I	II	社家屋敷	
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	朱	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
溜池(総理官邸)	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ	I	II	大名藩邸	
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
旧芝離宮庭園跡	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ	I	II	大名藩邸	
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一脱色	ベンガラ	Ag	I	II		
	椀	トチノキ	B	赤	黒	外一絵一脱色	ベンガラ	Ag	I	II		
丸の内三丁目	飯椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ・As	I	II	大名藩邸	
	壺椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	朱・As+S	I	II		
	汁椀	シオジ	B	赤	黒	外一絵一黒	朱	朱	X	X I		
	飯椀	シオジ	B	赤	黒	外一絵一黒	朱	朱	X	X I		
	蓋	シオジ	B	赤	赤	外一絵一黒	朱	朱	X	X I		
	蓋	トチノキ	A	赤	赤	外一絵一黒	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
	蓋	トチノキ	A	赤	赤	外一絵一黒	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
	蓋	トチノキ	A	赤	赤	外一絵一黒	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
	汁椀	トチノキ	A	赤	赤	外一絵一黒	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
	飯椀	トチノキ	A	赤	赤	外一絵一黒	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
小石川牛天神下	椀	ケヤキ	B	赤	黒	外一絵一赤	朱	朱	V	VI	旗本屋敷	
	椀	ケヤキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	朱	V	VI		
	椀	ケヤキ	B	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	朱	V	VI		
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	赤	外一絵一黒	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	赤	外一絵一黒	ベンガラ	Ag	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一銀	ベンガラ	Ag+As+S	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一銀	ベンガラ	Ag+As+S	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一銀	ベンガラ	Ag・ベンガラ	I	II		
汐留	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	朱	I	II	大名藩邸	
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	朱	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	朱	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	朱	I	II		
	椀	トチノキ	A	赤	黒	外一絵一赤	ベンガラ	ベンガラ	I	II		



地域	遺跡名	器型	樹種	木取	表面塗り技法		文様	塗装構造		使用顔料	遺跡の性格
					内	外		内	外		
江戸市中	東京大学本郷構内	椀	ブナ	B	黒	黒	外-絵-赤	I	II	朱	大名藩邸
		椀	ブナ	B	黒	黒	外-絵-赤	I	II	朱	
		椀	ブナ	B	黒	黒	外-絵-赤	I	II	朱	
		椀	ブナ	B	黒	黒	外-絵-赤	I	II	朱	
	錦糸町駅北口	椀蓋	ブナ	A	黒	黒	外-絵-赤	I	II	ベンガラ	旗本屋敷
溜池(永田町二丁目)	飯田町	汁椀	ブナ	B	黒	黒	外-絵-赤	I	II	朱	大名藩邸
	飯田町	椀	ブナ	B	黒	黒	外-絵-赤	I	II	朱	大名藩邸
	旧芝離宮庭園	皿	サクラ亜属	B	黒	黒	内-絵-赤	IV	III	朱	大名藩邸
金沢城下町	本町一丁目	椀	ブナ	A	黒	黒	外-絵-赤	I	II	朱	町屋跡
		椀蓋	ブナ	B	黒	黒	外-絵-赤	I	II	朱	
	安江町	椀	ブナ	B	黒	黒	外-絵-赤	I	II	朱	武家屋敷
徳島城下町	常三島	椀蓋	カツラ	B	黒	黒	外-絵-赤	I	II	朱	武家屋敷
		椀蓋片	カツラ	A	黒	黒	外-絵-赤	I	II	朱	
		椀蓋片	カツラ	A	黒	黒	外-絵-赤	I	II	朱	
	北前川町	椀破片	膜面のみ	一	黒	黒	外-絵-赤	I	II	朱	武家屋敷
高知城下町	高知城伝下屋敷	椀	ブナ	B	黒	黒	外-絵-赤	I	II	朱	武家屋敷
長崎市中	万才町 (高島宅跡)	平椀	サクラ亜属	A	黒	黒	外-絵-赤	V	VI	ベンガラ	町屋跡
		平椀	サクラ亜属	A	黒	黒	外-絵-赤	V	VI	ベンガラ	
大和	吉野塗(Aタイプ)	皿	サクラ亜属	A	黒	黒	内-絵-赤	IV	III	朱	参考
		皿	ブナ	B	黒	黒	内-絵-赤	II	I	朱	
		皿	ブナ	A	黒	黒	内-絵-赤	II	I	朱	

表2 吉野椀観察表



1 横木地と堅木地の要領  
(橋本鉄男『ろくろ ものと人間の文化史31』-1979- より原図引用)

2 近世会津木地師の木取りの方法  
(須藤『日本人の生活と文化(木) 暮らしの中の木器』-1982- より原図引用)

図2 近世以降の漆器(挽き物類)の木取り方法

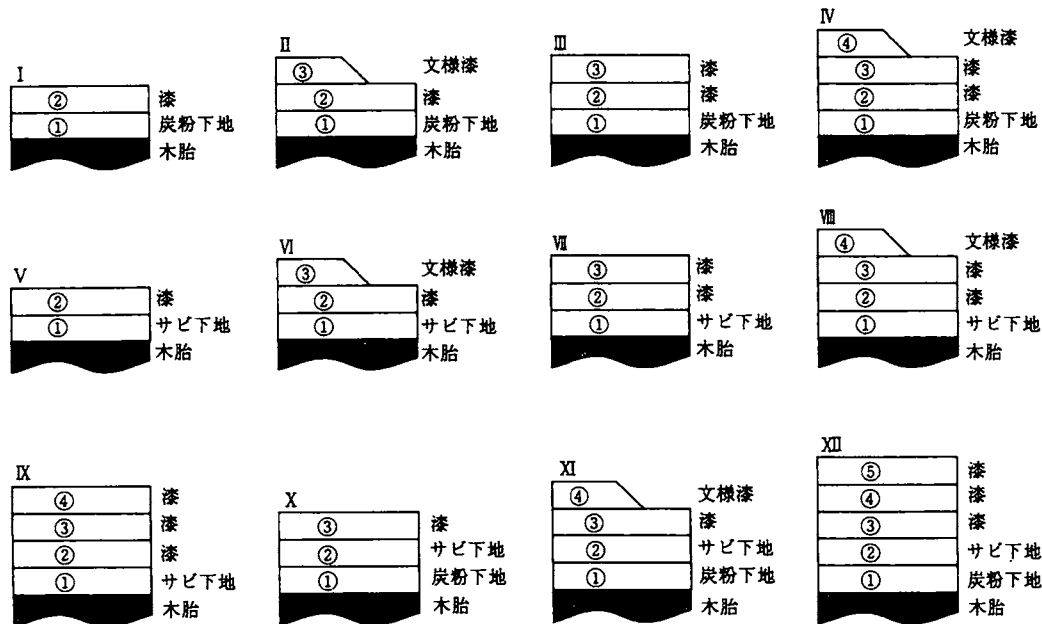
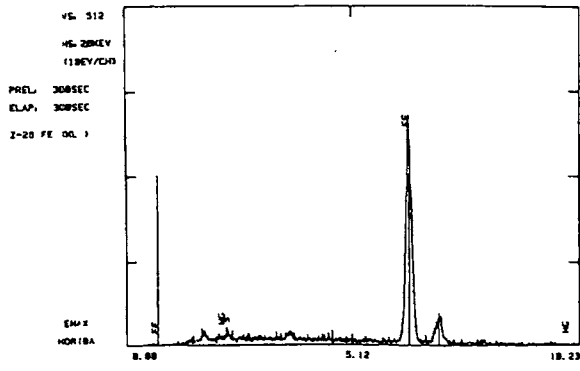


図3 漆塗り構造の分類

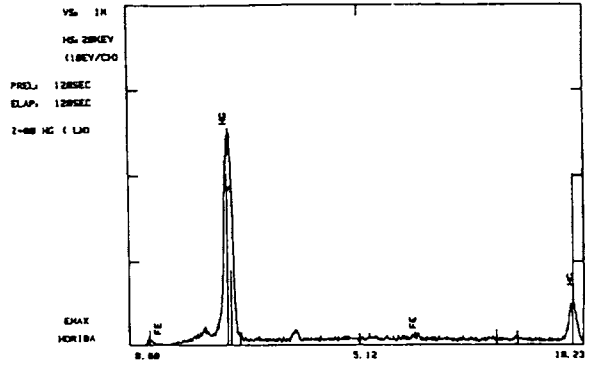
A 環 孔 材	a. ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリ ギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが靱性もあり、木皿など薄手の物に 適する。
	b. サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ 類、ヤマザクラ、ウワミズザク ラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少な くて、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物 にもっとも適する。
	c. ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カ ツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、 大量に入手できるので使用量は大きである。
	d. エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易い ので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られない が、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

表3 ろくろ挽き物の用材分類一覧表

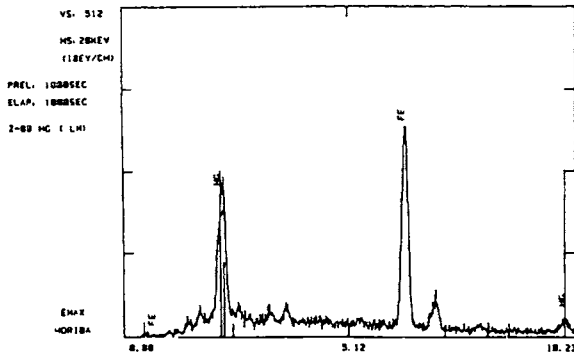
橋本鉄男『ろくろ ものと人間の文化史31』-1979-などを参考にして作成



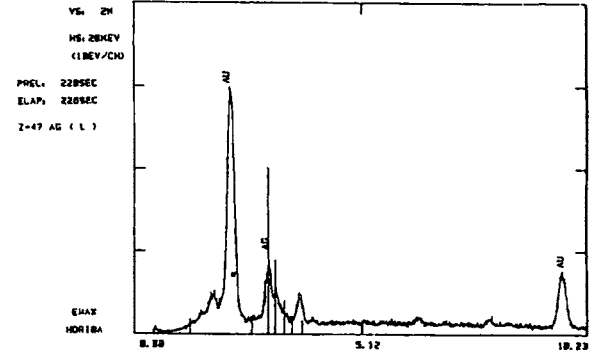
赤色系漆 ベンガラ ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )



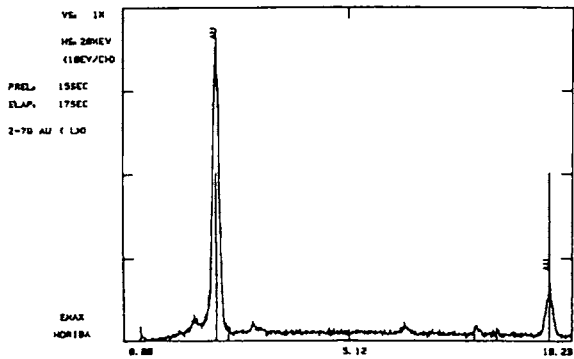
赤色系漆 朱 ( $\text{HgS}$ )



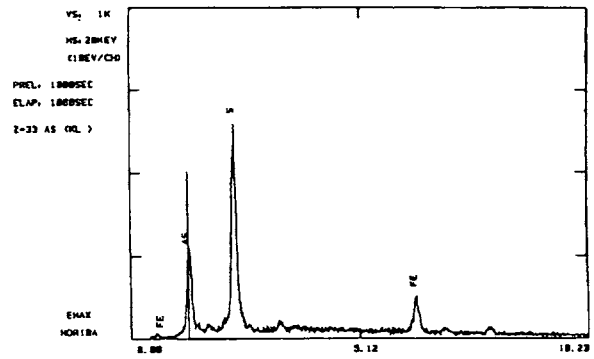
赤色系漆 朱+ベンガラ ( $\text{HgS}+\text{Fe}_2\text{O}_3$ )



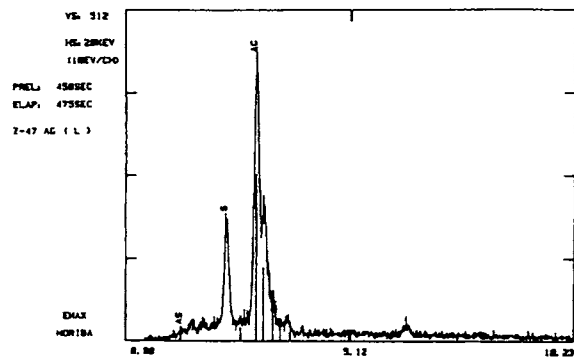
蒔絵粉材料 金 ( $\text{Au}$ ) + 銀 ( $\text{Ag}$ )



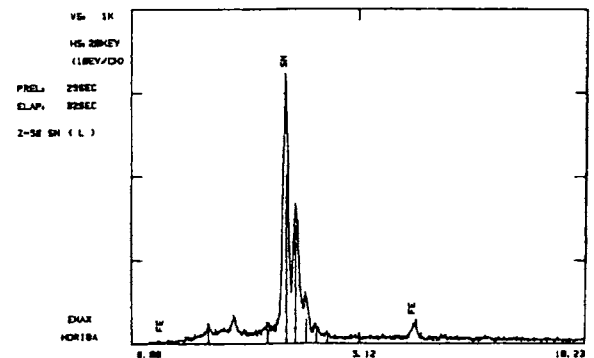
蒔絵粉材料 金 ( $\text{Au}$ )



蒔絵粉材料 石黄 (硫化ヒ素  $\text{As}_2\text{S}_3$ )



蒔絵粉材料 銀 ( $\text{Ag}$ )



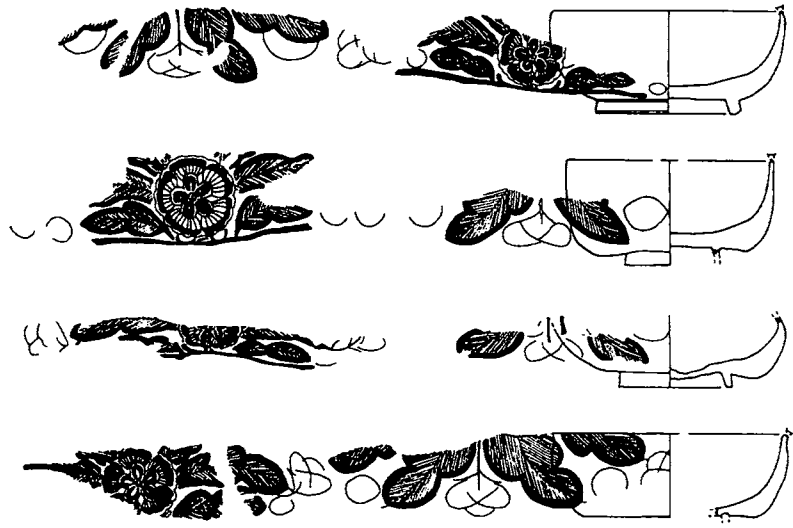
蒔絵粉材料 錫 ( $\text{Sn}$ )

図4 電子線マイクロアナライザー (EPMA) 分析結果

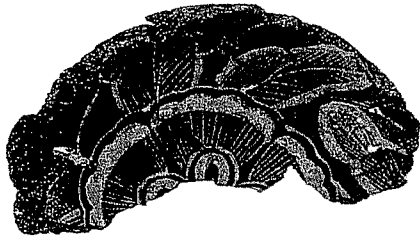




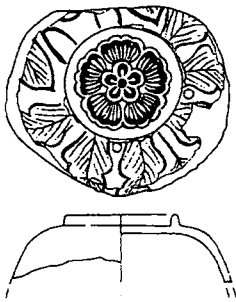
①『茶道早合点』(明和8年 1771)より



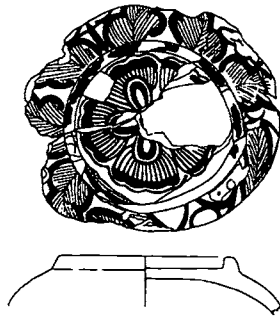
東京大学本郷構内遺跡



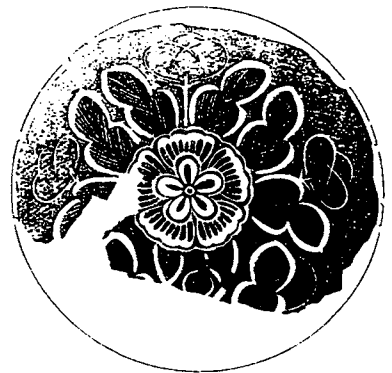
高知城伝下屋敷跡



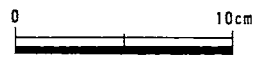
錦糸町北口遺跡 I



金沢市本町一丁目遺跡



旧芝離宮庭園



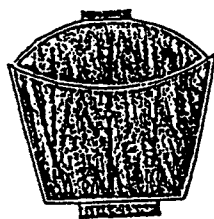
②各近世遺跡出土吉野碗



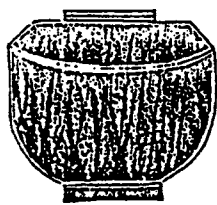
③吉野町の伝世品(民具 吉野町旧家所蔵)漆器資料

図5 吉野碗の器型と加飾意匠

飯汁椀・煮物椀の図



遠州椀



同丸椀



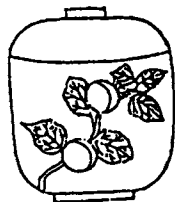
巖部椀



筋椀



大筋の椀



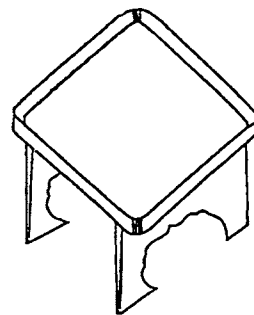
こげ椀



ひょうたん椀



朱椀に黒うるしにて鳥を書  
黄うるしに銀ふん  
雁をかく



遠州足付折敷

吸物椀の図



すきだめ



朱ニ黒ノかすり



黄朱黒の筋中すきだめ



黒朱黄の筋



朱ニ黒のかすり



朱黒の筋下黄ニ  
まきへ



朱の処朱トせいしつと  
黄トぬり分惣地黒



朱に黒まきへ



朱にまきへ



うるみ朱にまきへ

平皿の図



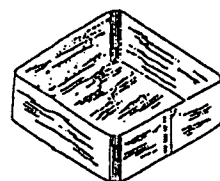
筋平皿



朱

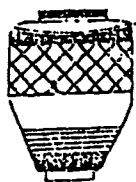


大平皿

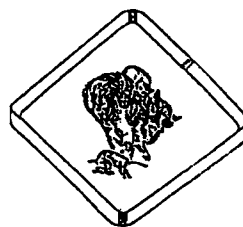


数寄屋遠州縁高

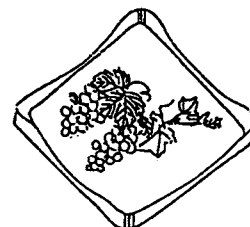
坪皿の図



折敷の図



平折敷



平折敷

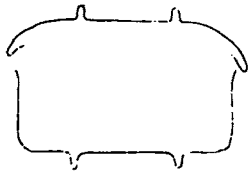
図6 『茶湯献立指南 卷之八』元禄9年(1696)挿図より



茶匠好み物	椀	酒盃	菓子盆	飯次
利休好 千利休 (1522-1591)	大丸椀(坪・平共五人前)、大一文字椀、上り子椀 蕃筒椀(坪・平共五人前)、小丸椀、朱丸椀 朱精進椀(坪・平・銚子・豆子・香物入) 朱菓子椀	朱盃置、黒盃置 朱高盃置、朱高杯(五人)		飯杓子、真中次、新小中次 朱手飯次(杓子共) 黒手飯次(杓子共)
道安好 眠翁道安(紹安) (1546-1607)				詩中次
元伯好 元伯宗且(断々斎) (1578-1658)	菓子椀置、面桶椀(菜盛付)			面中次(溜内黒大小) 溜面中次
直斎好 堅叟宗守(直斎) (1725-1782)	菓子椀置、相良椀、ウルミ刷毛目椀、ウルミ朱椀			松竹中次、亀中次、鶯中次 溜中次
一燈斎好 休翁宗守(一燈斎) (1763-1838)	糸目タメ椀、紅葉椀、梅鉢吸物椀		カキ合せ四方盆 相良盆	
江幸好・表 江幸宗左(達源斎) (1613-1672)	朱輪広椀、床手椀			
寛々斎好・表 (原叟好) 原叟宗左 (1678-1730)	雑器椀、ウルミ反り椀、喰初吸物椀、夕顔吸物椀 喰初形夕顔吸物椀、網ノ絵椀、ウルミ薄椀、夕顔椀 夕顔喰初形椀、鶴亀蒔絵椀、昔形椀、雑煮椀 ツボツボ煮物椀	萩の絵盃(大小) 萩ノ絵三ッ組盃	八角菓子盆 桜菓子盆 折敷菓子器(内朱)	
如心斎好・表 天然宗左 (1705-1751)	糸目椀(腰高付)、小一文字椀			
了々斎好・表 險叔宗左 (1775-1825)	細吸物椀、網ノ絵椀		独楽菓子器 溜独楽菓子盆	
吸江斎好・表 祥翁宗左 (1818-1860)		蟹二枚盃		
碌々斎好・表 瑞翁宗左 (1837-1910)			独楽菓子盆	
仙叟好・裏 仙叟宗室 (1622-1697)	菓子椀置、ウルミ輪広椀		溜湯盆	
常叟好・裏 常叟宗室(不休斎) (1673-1704)	サル尻菓子椀			朱手飯次
六閑斎好・裏 墨叟宗室(六閑斎) (1694-1726)			金溜手附菓子鉢	
一燈斎好・裏 一燈宗室(又玄斎) (1719-1771)	鶴亀蒔絵椀			
不見斎好・裏 石翁宗室(不見斎) (1746-1801)	糸目椀	クリ盃置、五枚置盃 寿亀盃		
認得斎好・裏 柏叟宗室(認得斎) (1770-1826)				松竹梅中次
玄々斎好・裏 頼中宗室(玄々斎) (1810-1877)	糸目形会席器具、紅溜砂子椀、物相椀、朱糸目吸物椀 二重葎椀、糸目コケ底椀、松竹梅蒔絵椀、七宝蒔絵椀	波絵引盃	野々宮菓子器	

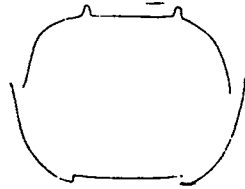
表5 茶匠好みの漆器類

面桶椀形



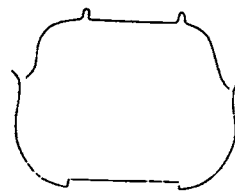
・食椀 ・汁椀 ・茶入  
・阿蓋 ・阿蓋 ・阿蓋

碁笥椀形



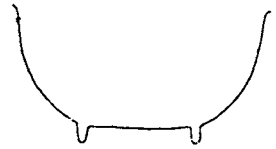
・食椀 ・汁椀  
・阿蓋 ・阿蓋

吉野椀



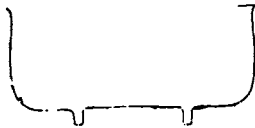
・食椀 ・汁椀  
・阿蓋 ・阿蓋

丸椀形



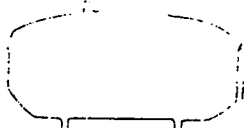
・食椀 ・汁椀  
・阿蓋 ・阿蓋

文字椀形



・食椀 ・汁椀  
・食椀蓋 ・阿蓋

阿蓋



阿椀二寸半蓋并阿蓋の形

阿蓋

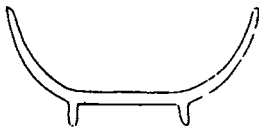


阿椀大形形

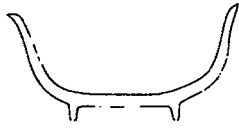


・食椀 ・汁椀  
・阿蓋 ・阿蓋

精進椀形

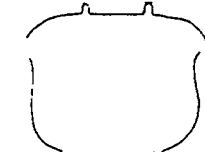


・食椀  
・阿蓋

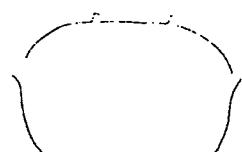


・汁椀  
・阿蓋

蓋



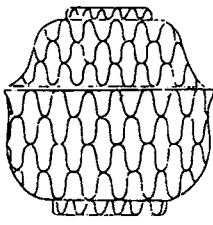
阿椀形



上り子二寸半蓋の形

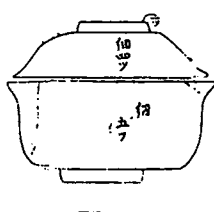
原叟好網の椀

食椀の蓋



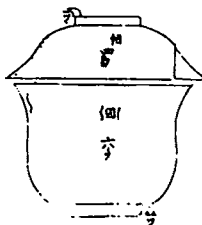
食椀大寸

阿蓋



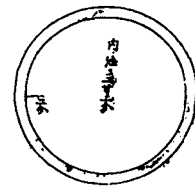
阿椀

阿蓋

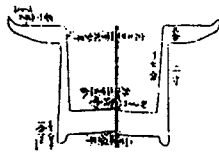
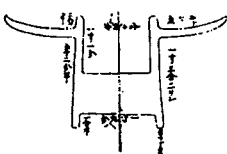


阿椀

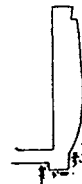
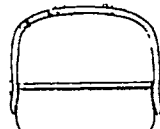
葎吸物椀



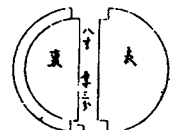
盃臺并盃大小形



手食次形



阿蓋



盃

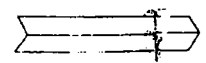
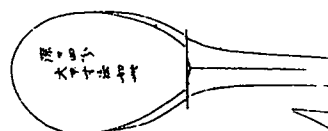
蓋



大蓋



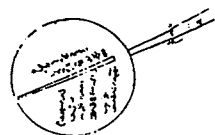
手食次二添フ杓子形



酒次



湯次



宗室好湯盆

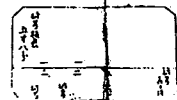
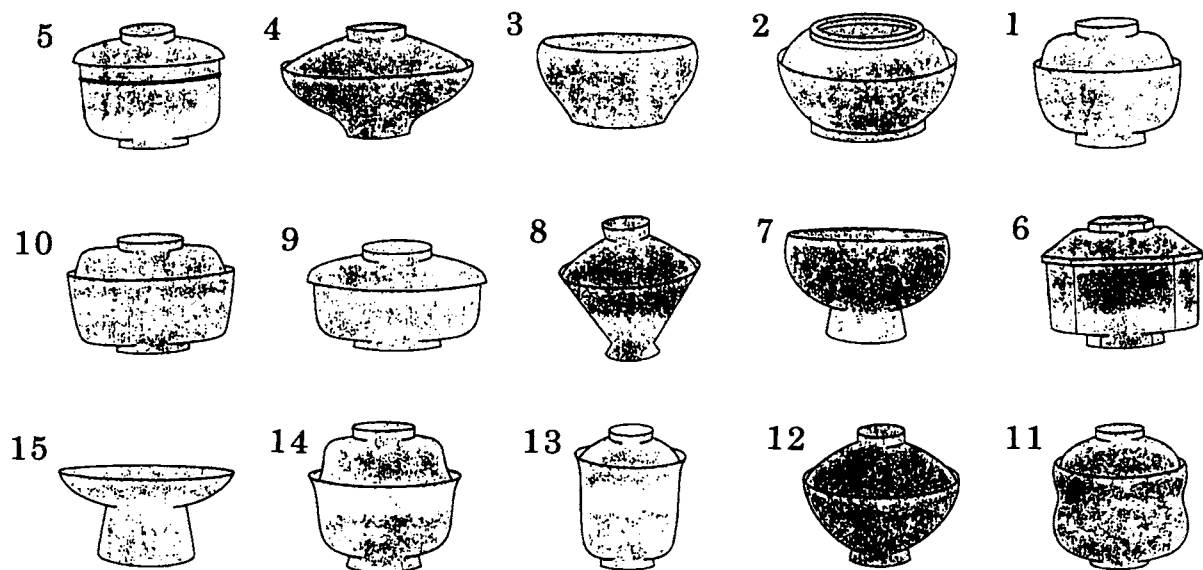


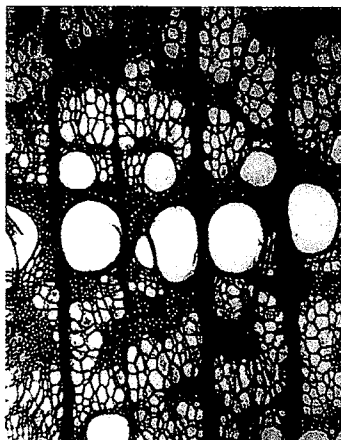
図8 『茶式湖月抄 三編下巻』 嘉永4年(1851)挿図より



No.	器型	基本的な形態
1	丸椀	会席では、最も基本的な椀形。腰の部分が張った椀形で、利休好と呼称。無地の黒漆塗椀であるが、精進椀になると朱漆塗椀。
2	菓子椀（輪広椀）	蓋のつまみと椀底の高台が大きめで同寸。口径が広く丈低い厚手の作り。菓子もしくは煮物を入れた。輪広椀とも呼ぶ。
3	坊主椀	高台がない。碁石を入れる碁笥に形が似るため碁笥椀とも呼称。
4	妻折椀	妻折は口縁部端を折ることで、腰から胴部への滑らかな曲線が口縁で急に折れた形。霞形椀とも呼称。
5	壺椀	底が深い椀形で、蓋のあるものとないものがある。本膳料理では四ッ椀の一つで、煮物椀として使用する。
6	面桶椀	面桶とは、曲物作りの弁当箱のこと。利休形の会席食器の一つで、身は腰が張った形で、蓋には面取りがされ、かぶせ蓋になっている。
7	杉成椀	高台は高めで、口縁はやや内にすぼまるように彎曲して胴部がややふくらんだ形を為している。
8	扇形椀	椀の胴部が扇の形に仕上がる。胴の部分がすっきりした直線になっているため、中身の量は少なくなる。吸物椀として使用する。
9	平椀	浅くて口径が広い平たい形の椀。本膳料理では、飯・汁・壺にこの平椀が加わって四ッ椀を構成する。煮物もしくは菜椀として使用。
10	一文字椀	横から見ると椀の底の部分が水平か、それに近い形を為す。必然的に腰が張り、胴から腰は垂直に近い形になる。この部分を面取した椀もある。
11	瓢形椀	名前の通り胴体を真横から見ると瓢箪の形のように柔らかなくぼみを持つ胴体に仕上げられている。口縁はやや内側に彎曲する。
12	梅形椀	やや全体にまるみをおびた形をしており、広口形。梅の花を上からみたような形をしていることからこの名前がある。
13	箸洗椀	会席料理の終盤近くに用いられる小吸物椀。極少量の淡白な味を賞味する椀で、一口椀とも呼称される小ぶりの椀。
14	端反椀	口縁が外側に反った形の椀で、反椀ともいう。縁を少し反せることで、汁物を吸いやすく成る。吸物椀として使用。
15	腰高	椀形でも、皿に高台が付いた形の盃形椀。高台椀とも呼称。本膳の五ッ椀や七ッ椀の一つとして使用。

図9 今日の伝統的な茶会席（懐石）食器としての漆器椀

写真1 にれ科ケヤキ



木口 (30×)

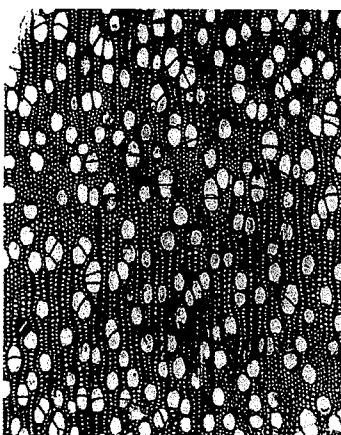


柱目 (100×)



板目 (50×)

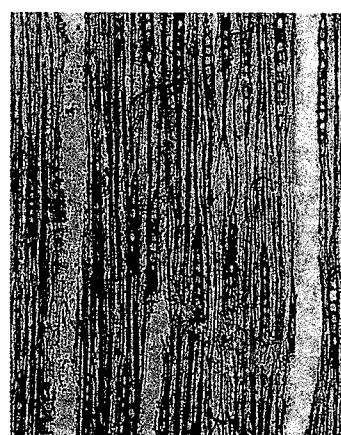
写真2 とちのき科トチノキ



木口 (30×)

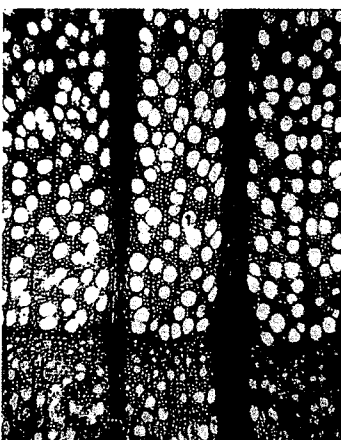


柱目 (100×)

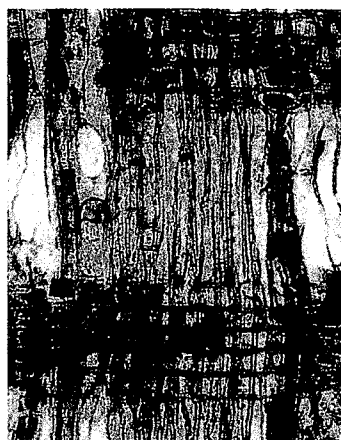


板目 (50×)

写真3 ぶな科ブナ



木口 (30×)



柱目 (100×)



板目 (50×)

写真1～3 代表的な樹種同定結果

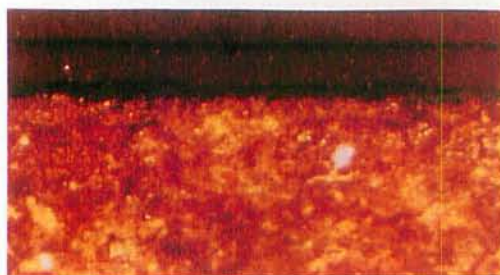


②ベンガラ漆  
①炭粉下地



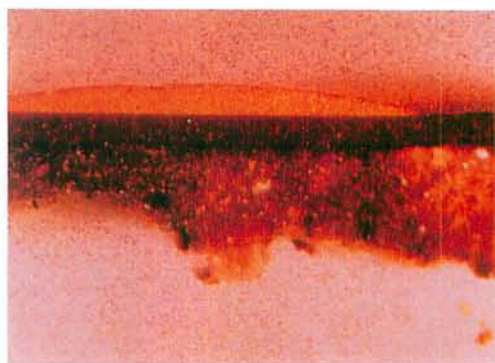
②赤褐色系漆  
①炭粉下地

黒色系漆 (I) (100×)



④赤褐色系漆  
③赤褐色系漆  
②生漆  
①サビ下地

黒色系漆 (IX) (100×)



③色漆(朱漆)  
②赤褐色系漆  
①サビ下地

有加飾漆 (VI) (100×)

写真4 代表的な漆器膜面の漆塗り技法(落射顕微鏡写真)

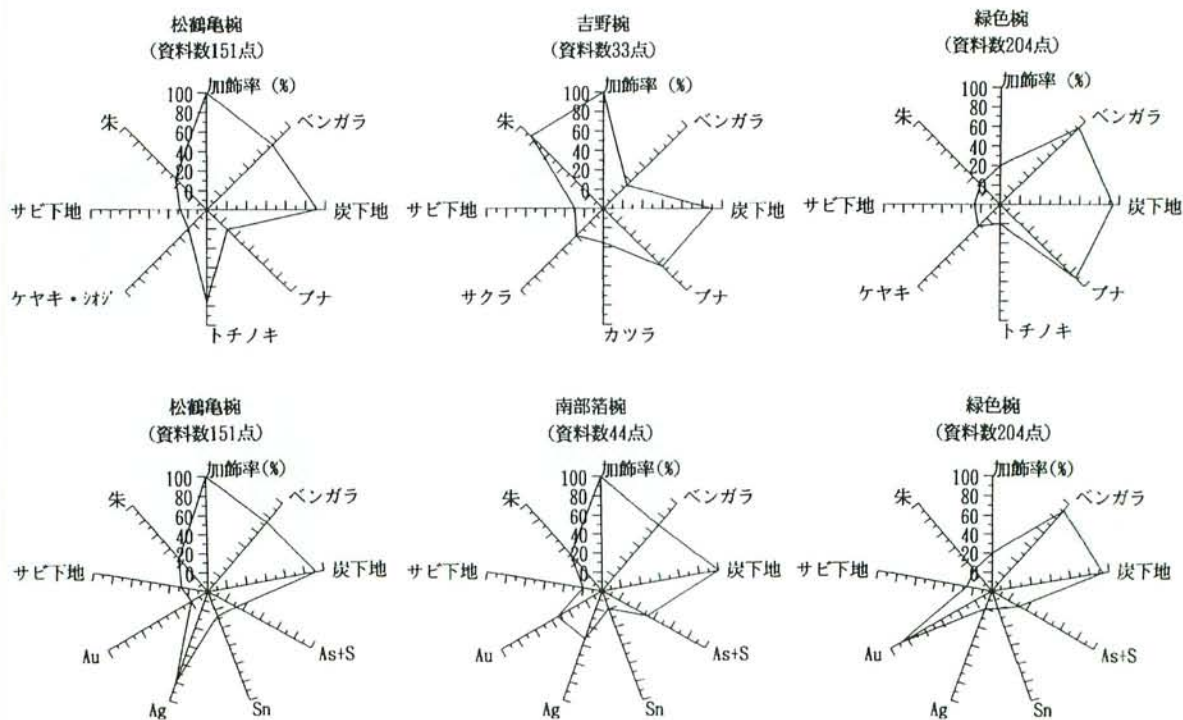


図10 各漆器椀における組成の傾向(A・Bタイプ)